
ゼロと忠実な使い魔達

鉄分

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロと忠実な使い魔達

【Nコード】

N8581X

【作者名】

鉄分

【あらすじ】

これはかつてゼロと呼ばれた伝説のメイジ、ルイズと彼女に忠誠を誓った複数の使い魔の物語

第一話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第一話

トリスティン魔法学院に在籍しているとあるメイジ、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは自身の眼前に広がる光景に啞然としていた。

自身の目の前に存在している物体は何なのか、そもそも本当に自分がサモン・サーヴァントで召喚した存在なのかと疑問に感じてしまっただけだ。

それは全長が10メートルを超えるような巨大なゴーレムだった。頑強な装甲が全身を覆い、見る者にその剛健さを如何なく印象付けている。

脚部の半ばまでをカバーしているベルトのような表皮には表面に先端が鋭く上がったスパイクのような棘が確認できる。腕部は共に丸太を通り越して土管のように太いが、右腕部が対となる腕よりも明らかに重厚でアシンメトリーとなっている。

そして、最も特異な特徴はその顔だ。堂々とした体躯の上には阿修羅を想起させる恐ろしい相貌をした頭部が搭載され、

太陽の光をうけて鈍色に輝いていた。

これが、かつてゼロと呼ばれた伝説のメイジ　ルイズと、死と破壊を司るディセプティコンの

リーダー　メガトロンの初めての邂逅であった。

物語は時を少し遡る……

ここはハルケギニア大陸北西部に位置する小国トリスティンが唯一

保有するメイジ養成所、トリステイン魔法学院。魔法学院では現在二年次に進級する生徒たちが自身のパートナーとなる使い魔を召喚、契約するサモン・サーヴァントと呼ばれる儀式を執り行っていた。この儀式は術者の魔法属性と専門課程を見極める意味合いも兼ねているため生徒たちの表情は真剣そのものだ。

大多数の生徒たちは各々が召喚した互いの使い魔を褒めあつたり自慢しいながら何気ない会話を楽しんでいた。ただ一人を除いては、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは杖を一際固く握りしめ、焦る気持ちを抑えつけながら自身の精神を集中させていた。

蒼茫とした草原にいるのはもはや彼女を除けばルイズのクラスを担当している火属性のメイジ、コルベールのみである。そう彼女は既に何回もサモン・サーヴァントの儀式を失敗して使っていた。使い魔召喚のための呪文「サモン・サーヴァント」を唱えては爆破を繰り返すルイズに周囲は呆れ、彼女を置いて学院に一足早く帰還していたのだ。

彼女の同級生であるキュルケは他の生徒が帰還してもしばらくはルイズの召喚魔法を見守っていたのだがちよつとした争いが原因で彼女もルイズを置いて学院に帰ってしまったのだ。

「ミス・ヴァリエール、今日のところはそこまでにして召喚の儀式はまた明日に持ち越しませんか？」

「もう一度、もう一度だけお願いします！！ チャンスを下さい！！」

「…わかりました。ではこれで最後にしましょう。リラックスですよ ミス・ヴァリエール。」

自身の禿頭の皮膚で太陽光を反射させながらコルベールはルイズに尋ねたが、ルイズは譲るそぶりを一切見せずに前方を見据える。

このサモン・サーヴァントの儀式は進級試験も兼ねている。そのためルイズが召喚に成功することが出来なければ、彼女はよくて留年悪ければ退学を通達されることすらありえたのだ。

トリステイン魔法学院の学院長であるオールド・オスマンはルイズが仮にサーヴァントを召喚することが出来なくても品行方正な生徒であり、大切な己の生徒の一人である彼女を退学にするようなことは決してありえないだろう。

しかし、ルイズのプライドがそれを許容できるはずがない。ルイズは貴族だ。加えて彼女は名門公爵家ヴァリエール家の息女である。

この世界では魔法が使えるメイジこそが貴族であり、貴族は平民を統治する支配階級に位置している。そして貴族の証は魔法が使えることだった。

加えて公爵家の娘がサーヴァントを召喚することすらできずにいる、などという事実は到底受け入れられることではなくルイズがサーヴァント召喚に失敗した場合、世間体を気にした公爵家によってルイズは家に呼び戻されてしまうだろう。

コモン・マジックですら碌に扱えないと周囲の生徒たちに嘲笑され続けていたルイズにとってサモン・サーヴァントの儀式は他の生徒を見返す絶好のチャンスである。

並々ならぬ決意を胸にルイズは儀式に臨んだのだが、結果は前述の通りである。

（何で！？何で何も出てこないのよっ！！）

（大丈夫よ…絶対大丈夫！次は絶対に成功するわ！あれだけ練習したじゃない、必ず次は成功させてみせる！！）

ドラゴンとかグリフォンとか贅沢は言わないから！何でもいいからお願い！！）

(でも、カエルはちよつと嫌かなあ・・・)

ルイズは同級生である水のメイジ・香水のモンモランシーが召喚したカエルの使い魔ロビンを思い出して、独りごちた。そして彼女は自身の持つ杖を握る手に更に力を込めると杖を振り上げ、全ての想いを込めて呪文を唱えた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！

五つの力を司るペンタゴン！！

私の運命に従いし、”使い魔”を召喚せよ！！」

その呪文と共に今までとは比べ物にならないほどの爆発が起きた。強烈な爆風が彼女を襲い、小柄な体は地面に背面から投げ出される。コルベールが自身の数少ない毛髪を幾本か犠牲にしたところで物語はプロローグへと至る。

第二話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第二話

「コルベール先生、これは一体なんなのでしょうか？」

ルイズの目の前には巨大なゴーレムが横たわっている。しばらく観察してみても動く気配がないところを見るとこれは生物ではないのであろうか。

自身では明確な解答が判然としないため、彼女は引率担当教官であるコルベールに尋ねてみた。

「・・・これは、見たところゴーレムのようですね。しかし、これほどまでに精緻で精巧なゴーレムは見たことが無い。」

「しかも、未知の物体で構成されている部分がある！！凄い！凄いですぞ！！ミス・ヴァリエール！さあ契約を」

矢庭に興奮しだしたコルベールとは対称的にルイズは己の顔に落胆の色を張り付けていた。

動かず生き物ですらないこんな物体をどうやって使い魔にしるといふのか、ルイズは唇を噛みしめると目の前に横たわっているゴーレムの顔にあたる部分によじ登り呪文を唱えた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。」

五つの力を司るペンタゴン。

この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。」

コントラクト・サーヴァントの呪文を紡ぐとゴーレムの口にあたる部分に軽く口づけを交わす。

ルイズはゴーレムの恐ろしい表情にやや気圧されながらも契約をこなした。

すると、心停止した人間が電気ショックを受けた時のようにゴーレムの胸部がドンツと跳ね上がった。

「きゃっ！」

「大丈夫ですか！！ミス・ヴァリエ……………これは」

再び地面に放り出されたルイズの安否を気遣うコルベールであったが、目の前に広がる状況の変化に気を取られてしまう。

目の前に横たわっていたはずのゴーレムが動き、赤く輝く二つの双眸で自分たちを睨みつけていたからだ。そして、目の前のゴーレムは言葉を発した。

「ここは、どこだ……………俺様は……………何だ……………」

小さな少女によって召喚された身の丈10メートルを超える巨大なゴーレム、メガトロンは困惑の極致にあった。自分自身が何者であったのかが分からない。

自分自身の名前・兵装等の自分に関することは間違いなく記憶している。しかし、自身が何を思い何を為していたのかが分からない。己には何か重要な目的があったような気がするが、自身の記憶領域を探ってみても何も見つからない。

金属生命体である彼は言葉どおりの意味で一度記憶した事柄を二度と忘れることは無い。しかし、メガトロンは自身を除いた凡そ全ての記憶を失っていた。

彼の記憶消失がサモン・サーヴァントによるものなのか、はたまた、

エネルギーの塊であるキューブをその身に受け止めたことが原因なのかは誰にも分らない。
ただ一つだけ分っていることがある、それは少女の目の前にいるゴーレムはディセプティコンのリーダーであるメガトロンではなく、独りのメガトロンそのものが其処には在った。

「ここは、どこだ・・・俺様は・・・何だ・・・」
「凄いい！！言葉が喋れるのね！！」

困惑するメガトロンを余所にルイズは弾んだ声をあげる。先ほどまでの落胆した様子からは考えられないようなはしゃぎっぷりだ。それもそのはず、人語を理解できるのは限られた高位のゴーレムが幻獣だけだからである。

「貴様は誰だ？」
「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。あなたのご主人様よ！」
メガトロンの質問に答えるようにルイズは叫び返す。

「あなたは何もの！」
「俺はメガトロンだ。」

ルイズが名を尋ねたのに対し彼は答えた。それは重い声だった。悠久の年月を感じさせながらも、闘争の感情をその内に孕ませている。

「先ほど貴様は主人といったがそれは一体どういう意味だ。」
「それは、それは、わたくしが説明しましょう！！」

目の前にいるゴーレムから発せられる剣呑な雰囲気を感じ取ったのがコルベールが仲裁するように両者の間に割って入った。

一通りコルベールの説明を聞いたメガトロンは大笑した。

「こんなちんちくりんが俺様を使役するだと！ 笑わせるな！！」

「おい、貴様、笑わせたいのならば もっと面白いジョークを持ってこい」

ルイズはメガトロンの傲慢な態度に食って掛かる。

「貴様つてなに！？ご主人様に向かってそんな口きいていいと思ってるの！？」

恐れ知らずな少女である。

「というか！さつきちゃんとか乗ったでしょ！？覚えなさいよ！私はルイズ！ルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ！」

「メガトロン、あなたは私に使い魔として召喚されたの！使い魔は一生メイジの手となり足となり従うのよ！ だから私はあなたのご主人さまなの！分かった？！」

メガトロンの素性を知っている人が聞けば卒倒するようなセリフを言い切るとルイズは胸を張る。

いままで座って話を聞いていたメガトロンはルイズの言葉を聞き終わると即座に立ち上がった。

「何よ！ややややるっていうの？！」

ルイズは震えながらも杖を取り出して構える。しかし目の前にいるゴーレムは彼女に向かい合わずにあらぬ方向に向かって自身の左腕

を振るった。

「え？」

ルイズは啞然とした。自身の使い魔であるゴーレムが何でもないうに左腕を振るっただけで巨大な大穴が生まれたからだ。

メガトロンは自身の左こぶしにあたるモーニングスターをアイアンメイスとして地面に向かって叩きつけた。その一撃は大地を深々と抉り、土ぼこりを巻き上げる。

叩きつけたモーニングスターをこぶしに取り付けなおすと彼はルイズに向かって再び話しかけた。

「どうだ、これが俺様の力だ。それでも貴様ごときが俺様を使役するとのたまうか。」

ルイズの前方には人間が軽く20人は入れるような大穴がぽっかりと空いている。目の前にいるゴーレムは彼女に主としての資質を問うているのだろうか。

しかし、ルイズは退かない、眼前で強大な力をまざまざと見せつけられても彼女の眼の光は失われず、しっかりとその先のメガトロンを見据えていた。

「メガトロン、あなたは私の使い魔よ、それは絶対に変わらない。私は確かに弱いわ、コモン・マジックすらもまともに使えない・・・でもいつか絶対に強くなる、強くなってみせるわ。強くなってあなたが誇れるようなメイジになってみせる！だから・・・だから私に仕えなさい！メガトロン！！」

ルイズの決死の叫びに対してメガトロンは内心驚嘆していた。目の前にいる小さな生き物は自身の力を見ても一切物怖じせず己を見

つめている。

非力であるにもかかわらず、力に屈しないルイズの強さにメガトロンは興味を抱いた。気が付けば彼は目の前にいる小さな少女に片膝をつき頭を垂れていた。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、力に屈しない心をもつ強き者よ。

永遠の忠誠と絶対の服従をここに誓おう。先程の非礼を許してくれ、

」

ルイズは片膝をついたメガトロンを見上げながら微笑む。

「気にしてないわ。メガトロン、これからよろしくね」

それはゼロと呼ばれるルイズに初めて使い魔ができた瞬間だった。

・メガトロン：元ディセプティコンのリーダー strength

rank 10

第三話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第三話

使い魔召喚の翌日ルイズは自身の部屋のベッドの上で目覚めた。

窓から差し込む明るい日差しがよく晴れた朝だということを教えてくれる。

ルイズはまだ半分寝ている顔をしながらも日頃の習慣に従い、学院の制服に着替え始める。

その様子は寝起きにも関わらず上機嫌だった。

自身の身支度を済ませると朝食の時間が近づいていることに気づき、部屋の扉に手をかけた。

ルイズが朝食を食べるために部屋の扉を開けると隣の部屋からも人が出てきた。

「おはよう。ルイズ。」

燃えるように赤い髪が印象的な少女がそこにはいた。

褐色の肌をした肉体とほりが深い顔立ちは美しいと多くの人が思うだろう。

大きな胸とそこを強調するようにブラウスのボタンを二つも外している姿は周囲に色気を振りまいている。

「おはよう。キュルケ。」

かけられた声に気づいたルイズは少女のほうを向き挨拶を返す。

その顔はやや不機嫌そうな色に染まっていた。

声をかけてきた少女の名はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。

トリステイン王国の隣国、帝政ゲルマニアの伯爵令嬢である。

またツェルプストー家はルイズの実家であるヴァリエール公爵領と国境を挟んで向こう側にある。

しかし、両家の間には因縁深い事件が多く二人は犬猿の仲にあった。またルイズはキュルケのプロポーシオンを少々妬んでいる事もあり特に仲が悪い。

もつとも、キュルケはルイズをからかう事はあれど悪い感情を持っているかどうかまでは

分からないが。

ルイズはキュルケに尋ねた。

「昨日はどうだったのよ、」

ルイズの問いに答えるようにキュルケは話を進めた。

「私は一発で成功よ。しかも……フレイムーおいでー。」

キュルケの部屋から呼び出したのは深紅の皮膚をもったトカゲだった。

背は1メートルほどもあり四つの足は力強く、太かった。尾の先からは炎が踊っている。

「見て立派な火トカゲでしょう。この見事な尻尾の炎、ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ。好事家に見せたら値段なんかつかないわ。」

「ふーん。」

「？」

キュルケは拍子抜けたように首をかしげる。いつものルイズであれば悔しがるなどの反応が見られるはずだが、いまのルイズからはそのような

様子は欠片も見られない。むしろあり余る余裕すら感じられる。

すると、キュルケは自らの使い魔であるフレイムの様子がおかしいことに気が付く。

震えているフレイムに彼女は声をかけるが様子は変わらない。恐怖

しているのだろうか？

その視線はルイズに釘付になっている。

キュルケは再びルイズに目を向けるとヒツ、と軽い悲鳴をあげた。

何故ならばルイズのすぐ傍から爛々と輝く巨大な赤い単眼が覗いていたからだ。

ルイズは震えるフレイムをニマニマと見つめると傍らに控える使い魔に声をかける。

「だめよ、ラヴィツジ。怯えちゃってるじゃない、この子は敵じゃないわ。」

ラヴィツジと呼ばれたそれは大きなジャガーであった。それは小柄だが人間であるルイズの肩口に届くほどの巨体を有している。

メガトロンと同様に全身を装甲が覆い、身体の堅牢性が一目見て分かる。

口にはのこぎりのような乱杭歯が無数に生えそろっており、歯を剥き出しにして目の前のサラマンダーを威嚇していた。

背中の後脚部には一対の円筒形をした筒が取り付けられていて、その先端はキュルケに向けられていた。長くしなやかな尾は人間の脊椎を思い起こさせる形状をしており、先端には三つの棒状の物体がアンテナのように掲げられている。

「ふふふ、私の使い魔、ラヴィツジ、ふへへ」

ややトリップ状態にあるルイズがそのジャガーの首筋を撫でるとジャガーも嬉しそうに巨大な単眼を細めて彼女にすり寄った。

その様子を口をパクパクさせながら眺めていたキュルケはルイズに話しかける。

「ちよちよっと・・・それ、何？ 見たところ動いているようだけれど。」

「ラヴィツジよ、私の使い魔 甘えん坊でかわいいのよ。」
「で・・・でもそれ金属でできてるわよね？機械なの？」
「違うわ！ラヴィツジは生きてる。だってこんなにかわいいのよ！
機械だなんてありえない。」
どう見積もってもかわいいとは思えない凶悪な人相をしている獣を
愛おしそうになでるルイズをみてキュルケは嘆息した。

一人と一匹は朝食をとるために、『アルヴィーズの食堂』へと向か
う
そこは、食堂とは言えとても華やかな作りが施されたいかにも貴族
趣味、といった建物である
中也豪華絢爛という言葉がぴったり当てはまるほどの内装が施され
ている。

中には百人はゆうに座る事ができるテーブルが三つ並んでいる。
学年別に分かれているらしく、ルイズはラヴィツジを連れて二年生
所定の真中のテーブルへと進んだ。
ルイズは自分の席へと進み着席すると朝食を食べ始めた。

ラヴィツジがルイズの周囲を油断なく歩き回る中、彼女は内心鼻高
々であった。周囲からは自分の使い魔であるラヴィツジに対する畏
怖と関心の入り混じった声が聞こえてくる。
彼を召喚したのが自分であるという自負が彼女を良い気分になんか
いたのだろうか、朝食を食べ終わるとルイズはラヴィツジをつれて
教室へと向かった。

ルイズは教室でラヴィツジを撫でながら教科担当の先生を待っていた。彼女に撫でられているこの巨大な獣の存在に初めて気づいたのはコルベールであった。

メガトロンがルイズに使い魔としての忠誠を誓っていた際に彼の巨体の陰に横たわっていたラヴィツジを発見したのだ。

メガトロンはコミュニケーションをとるとルイズにこの獣についての事実を話し始める、どうやらこの獣は俺様に仕えているらしい、と。そして、己はその巨体さゆえに主に四六時中付き従うことは出来なため部下であるこの獣を主の身边警護に任ずること、この獣はラヴィツジという名前を持っていることをルイズはメガトロンから通達される。

「ラヴィツジよ、貴様の最優先事項は主を守ることだ。全てを後回しにしてこの任務を達成しろ。」
メガトロンの命令を受諾したラヴィツジは今朝からルイズに付き従っている。

当初は四足獣であるラヴィツジの見た目に押されていたルイズも自身に甲斐甲斐しく仕えるこのしもべに対する愛情が湧いてきたのだろつか、いまではラヴィツジを周囲が引いてしまつくらいに可愛がっている。

教室で待機していると他の生徒も自らの使い魔を引き連れてやってきた。教室内には様々な使い魔がいる、フクロウに今朝のサラマンダー、モグラなど多種多様だ、ただしルイズの使い魔であるラヴィツジを皆が恐れているという共通点を除いては、だが。

教壇に中年の女が現れた、おそらく教師なのだろう、一旦教室が静かになる

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。この赤土のシュヴルーズ、
こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ。」
と満足そうに生徒と使い魔を眺めるシュヴルーズは

「あらあら、な・中々変わった使い魔を召喚したようね、ミス・ヴァリエール」

ルイズとやや怯えながらルイズの傍に佇むラヴィツジを交互に見た。

教室にざわざわとささやく声が木霊した。

「気持ちの悪い獣を召喚しやがって、檻にでも閉じ込めておけよ！
！ゼロのルイズ！」

ルイズは席を跳ねるように立ち上がりラヴィツジを宥め始める。見るとヤジを飛ばした少年 マリコルヌに今にも跳びかかるうと身構えるラヴィツジがいた。

おそらくルイズが止めなければラヴィツジは己の持つ鋭利な爪で彼をズタズタに引き裂いていただろう。自分が馬鹿にした少女によって命を救われたことを知らないマリコルヌはいまだにルイズを罵っていたが、ラヴィツジの巨大な単眼によって射竦められていた。

加えて、「ミスタ・マリコルヌ。友達を馬鹿にするものではありません」

というシュヴルーズの言葉とともに目の前に現れた赤土に口をふさがれた。

第四話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第四話

「ちよつと失敗したみたいね」

そう言ってボロボロの姿のルイズは散らかった教室の片づけを行っていた。

『火』『水』『土』『風』の魔法の四大系統。失われた系統である『虚無』。

それら魔法と生活との密接な繋がり等々を説明するあたりまで授業は問題なく進められた。

しかし、シュヴルーズが錬金の実演を行い、それをルイズにもやらせたところから問題は発生した。

ルイズの錬金の魔法によつて教卓の上に置かれていた石が爆発をおこし、教室を半壊させたのだ。

あらかじめ机の下に避難していた生徒たちにも甚大な被害が及び

「何やってんだ！ゼロのルイズ！」

「いつだつて成功の確率、ほとんどゼロじゃないかよ！」

そんな怒号がラヴィッジがいるにも関わらず教室の内に響き渡った。

失敗魔法による爆発で半壊した教室の片付けを命じられたルイズは黙々と掃除を行った。

ラヴィッジも片づけを彼女と一緒に手伝っていたが重い沈黙が場を支配した。

しばらくするとルイズが唐突に口を開いた

「わかつたでしょ？私がゼロって呼ばれる理由……」

「そうよ、私は魔法の成功率”ゼロ”%、だからゼロのルイズ。笑っちゃうわよね、魔法も満足に使えない癖にあなたを従えているなんて」

「こんな主じゃ、直ぐにメガトロンも私に愛想をつかしちゃうかもね」

半ば自暴自棄気味に叫ぶルイズ、そして彼女の声に応えるものがない。

「ルイズ様、お顔をお見せください。傷がついています。」

「!!!!」

ルイズは始めラヴィッジが喋ったのかと思っていたが、喋ったのは目の前にいる己の顔程の大きさをした虫のようなものであった。それは細く長い六本足を器用に使って身体を支えている。

顔には二つ円柱状のパーツがあり片面の部分が赤く光っているためそれが目の役割を果たしているのだと理解できる。

「あなたは誰？見たところラヴィッジと同じように金属でできているみたいだけど、」

「申し遅れました、俺はドクター。ドクタースカルペル。メガトロン様に仕えている医師でございます。」

ルイズが問うたところ目の前にいる虫のような物体はメガトロンやラヴィッジの身体を保守・点検する医師であるという。

普段はラヴィッジの胸部格納庫に収まっていて、仕事の際にでてくるらしい。他にもラヴィッジは似たような存在を複数保管しているというのだから驚きだ。

「それで、私の傷を見てくれるの？」

「ええ、メガトロン様にもルイズ様が傷を負った際には最優先で治療にあたるようにと、きつく言い含められていますから。」

とスカルペルは述べると肩に跳びついて爆発の際に生じたルイズの右ほほの軽い切り傷を治療し始めた。

何かよく分らない光線を傷口に照射しているドクターにルイズは尋ねた。

「ドクター、メガトロンは今どこで何をしているの？」

「メガトロン様は今現在南西400リーグの上空で大陸を測量しています。」

「な・何をしているのよあいつは」

「ルイズ様の身の安全を守るプランを練るためには周囲の地形、生物の分布、気候などの情報を集めなければならないと申しております。」

「メガトロン様はルイズ様がいるこの大陸のことを何も知りません、故に早急な測量に出かけたのでしよう。ご安心くださいメガトロン様は不死身です。」

「でしょうね。あいつだったら・・・」

ルイズは昨日の出来事を思い出す。軽々と大穴をつくるあの力、人型からヴィークルモードに変形して高速で空を滑空することもできるあのゴーレムの優秀さを彼女は思い知ることになる。

エイリアンタンクにしがみついていた彼女は余りの速さから学院につくまでに己の意識を手放していた。

（その後学院では、空を飛ぶルイズの巨大な使い魔に関する話題で騒然となったのは当然の帰結と言える。）

「ルイズ様、治療が終わりました。」

「えっ！もう終わったの？すごいわ、ドクター。あなたは、優秀な医師ね」

とルイズは頬を触って頬の傷が消えたことを確認するとドクターを褒める。彼は満更でもないように自らの手腕を誇っていた。

魔法が普及しているハルケギニア大陸では怪我人や病人の治療と言えば水属性のメイジによる治療が一般的である。

その中で魔力を使わずに怪我を治療することが出来るドクターのよ
うな存在は貴重なのであろう。

ルイズは己の使い魔の優秀さを噛みしめると同時に彼らに負けない
ように自分も更に努力を重ねようと決意を新たにするのであった。

・ラヴィツジ：追跡、潜入のエキスパート strength r

ank 4

・スカルペル：膨大な解剖学の知識を有する、医師 strength

thank 1

第五話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第五話

メガトロンは大国ガリアに連なる火山山脈上空を亜音速で滑空しながら考えに耽る。

何かがおかしい、ここに呼び出されてから何かが自分に起こっている。

思えば今までの己の言動、不可解な点が多すぎる。

なぜ使い魔になることを承諾したのか？考えれば最初は抵抗したもののごく自然に承諾していた気がする。

通常の自分であればルイズを即座に叩き潰していたはずだ。宛ら人間が小さな子虫を踏みつぶすかのように。

しかし、己はそれをしなかった。何故か？何度か考えてみたが答えは判然としない。

加えて、今の自分には記憶が大幅に失われている。幾度も復元を試みたが全て失敗に終わった。残留していた記憶を繋ぎあわせてみたが己を除いた殆どすべての記憶が失われている、という事実が改めて浮き彫りになったことを再確認して終わってしまった。

メガトロンは自身の記憶に関する思考を打ち切ると元々の目的へと己の思考を傾注する。

膨大な記憶を失ったメガトロンの目下の懸案事項はルイズだ。

自身が忠誠を誓った小さな主を守ること。

目的を忘失した今の彼が考えることは唯々それだけだった。

メガトロンは真下に広がる雄大な山脈の詳細な地形データを記録し

続けていたが、急速に極超音速まで加速すると自身のレーダーが探知した大きな熱源反応へ向けて降下を始めた。

「主に手土産を用意せねばな。」

山脈の火口付近には、ターゲットにされたことに気づかずに眠りかけている生物が幸せそうに寝息をたてている。彼にターゲットにされたそれには、全く以てdon't mindとしか言いようがない。

第六話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第六話

ヴェストリの広場は、魔法学院の敷地内「風」と「火」の塔の間にある中庭である。

そこにはこれから行われる”決闘”を見物しようとする生徒たちで、広場は溢れかえっていた。

青銅のギーシュとゼロのルイズの決闘は学院生の間で驚異的に広まり、殆どの学生たちの知るところとなった。

「諸君！決闘だ！」

その広場の中心、決闘を申し込んだ男子生徒、ギーシュは薔薇の造花を掲げ高らかに宣言をする。うおーッ！見物人から歓声が巻き起こる。

「ギーシュが決闘するぞ！相手はゼロのルイズだ！」

ギーシュは腕を振って、歓声にこたえている。

一方、決闘を受けたルイズは杖を握りしめ目の前の男子生徒を睨みつけていた。

人だかりの最前列では、ルイズの使い魔であるラヴィッツジがギーシュを巨大な赤い単眼でねめつけている。

その周囲のみは巨大な獣の迫力に気圧されて、キュルケとタバサという二人のトライアングル・メイジのみがいるだけだった。

事の発端はシエスタと呼ばれる学院に従事しているメイドがギーシュの落とした香水を拾ったことだった。

その香水を切つ掛けにして彼の二股がバレたわけだが、ギーシュは原因を彼女に擦り付け叱責した。完全な八つ当たりだ。

二股が露見した原因が彼にあることは周囲も分かっているはずだが、誰もそれを注意することはない。

時々、野次や歓声を飛ばすことはしても目の前の罪無き少女を救おうとする気は無いらしい。

少女の顔は、既に気の毒なほど真っ青になり今にもその場に倒れそうなほどだった。

ルイズの顔に怒りがこみ上げ始める。

何故ならば、この光景は彼女の目指す貴族とは似ても似つかないものだったからだ。

「ギーシュやめなさい！」

ルイズはそういつて毅然と彼を諫める。

「もうそれぐらいにしたら？ 元はといえばあなたが二股するのがいけないんじゃない。」

「その通りだギーシュ！ お前が悪い！」

ルイズの尻馬に乗った誰かがそう言うのと周囲がどつと笑い出した。ギーシュの顔が赤くなる。

「ふん。確かにゼロのルイズは平民と仲良くしているのがお似合いだろうな。」

だが、ギーシュは薄い笑みをこぼしながらそういい捨てた。

「なんですって？」

その言葉を受けルイズの顔にはいっそうの怒りが満ちる。

「魔法が使えないゼロは平民と仲良くするのがお似合いだと言ったんだよ。そうだろう諸君！」

「その通りだ！」

「魔法も使えないゼロは黙ってる！」

ルイズを罵る言葉に反応してラヴィッツは周囲にいた生徒たちを唸り声をあげて威嚇する。

その恐ろしい音に恐怖した幾人かの生徒はその場を逃げ出した。しかし、

「つ・・・使い魔に擁護されるとはやっぱりゼロはゼロだな。」

ラヴィッツに怯えながらもギーシュは黙らない。腐っても軍人の家系ということだろうか。

更なる侮辱の言葉にルイズは叫ぶ。

「ギーシュ・ド・グラモン！ 私、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールはあなたに貴族として決闘を申し込むわ！」

「もちろん、使い魔抜きの一対一よー！」

その一言で周囲の声がピタリと止まった。

「とりあえず、逃げずに来たことはほめてやるっじゃないか。」

ギーシュが余裕の態度でそう言ったのを見て、ルイズは答える。

「誰が、逃げるものですか。」

「と・・・所であれば本当に介入してこないんだろうね。」

ギーシュはラヴィッツを戦々恐々と言った感じで指さすと彼女に問う。

「ええ、私が命令したんだもの。あなたの相手はこの私よ！だれにも邪魔はさせない。」

とルイズが言うのを聞いてギーシュは安堵したように息を吐く。もし眼光に力があるのなら彼はとっくにラヴィツジに睨み殺されているだろう。

ラヴィツジはギーシュを睨みつけ、ルイズを心配するかのようにはいた。その姿にルイズは

「大丈夫よ、ラヴィツジ。あなたの主を信頼しなさい。」
と声をかける。そして、二人の決闘が始まった。

決闘は終始ギーシュの優勢で推移した。

ギーシュが錬金した青銅の女兵士、華美な装飾が施された甲冑を身につけた乙女は容赦なくルイズを蹂躪した。

青銅でできた兵士の体当たりや脚撃は次々と彼女の体に傷をつける。ルイズも錬金の魔法で幾体かの兵士を破壊したが無駄だった。

ラヴィツジは己の主が痛めつけられる様を見て爪を打ち鳴らし、牙を剥いてギーシュを威嚇するが、ルイズの命を決して破るうとはしなかった。

「なかなかやるじゃないか、ルイズ。僕のワルキューレを相手にここまでやるなんてね。見直したよ。」

「だが、ここまでだ。どうだい、そろそろ降参してみては如何かな。」

ギーシュは額に浮かんだ汗を拭いながら問う。

しかし、ルイズはにべもない。

「まだよ、私は絶対にあきらめない。」

「約束したのよ、ラヴィツジにドクターにそしてあいつにも・・・私は絶対に負けないって。」

あいつやドクターとは誰なのか、ギーシュには分らない。しかし、満身創痍にもかかわらず一切退かないルイズを見て彼は覚悟を決める。

「いいだろう、ルイズ。これで終わらせる!!」

「いけっ!!ワルキューレ!!敵を気絶させる!!」

残存した三体のワルキューレがルイズの意識を断とうと武器を構え、腕を振り上げる。

魔力が底をつき全身に負った傷や打撲で、もはや満足に体を動かすことすら出来ない彼女はそれでも前を見据え、杖を構えていた。

観客の最前列で決闘を観戦していたキュルケはルイズの身を案じていた。

「まったく、あの娘ったら。無茶ばかりして」

「タバサ、これが終わったら直ぐに治療してあげなさいな。」

と言うと、キュルケはタバサと呼ばれた青髪の少女があらぬ方向の虚空を見つめているのに気が付く。いつの間にかルイズの使い魔であるラヴィツジも同様の方角を見つめていた。

「どうしたの?タバサ。」

するとタバサは虚空へ指をさして言った。

「来る。」

「来るって何が?」

キュルケはその方向を見据えると地平線の先に小さな黒点があるこ

とを知る。

それはグングンこちらに接近しており、その接近に伴って見知らぬ音が辺りに響くようになる。

周囲の学生たちもそれに気が付いたのか一斉に指をさして何事かと騒ぎ始める。風と水を操るトリアングルメイジであるタバサであるからこそ空気の微細な変化を感じ取って一足早くその存在に気が付いたのであろう。

音速を超える速度で飛来したそれは轟音を辺りに撒き散らしながら広場に着陸する。

「主よ!!無事か?!!!」

それはラヴィツジから緊急信号を受け取って急ぎ学院に帰還したメガトロンであった。人型にトランスフォームした彼は広場に着地するとルイズの安否を伺う。

そして自分の主に危害を加えた相手を見つけると左腕から幾本もの細い金属製アームを出現させ一瞬でギーシュを地面に押さえつけた。

「小僧・・・俺様の主によくも危害を加えてくれたな。殺す!!殺してやる!!!」

「貴様の肉片を一片残らず蒸発させてやる!!」

怒鳴りつけるように叫ぶメガトロンの言葉を聞いてギーシュは恐ろしさのあまり口から泡を吹いて気絶していた。

するとメガトロンはギーシュを捉えている腕とは反対側の腕から巨大な刃を取り出した。

ジャキンツという音とともに出現したそれは、ルイズの身の丈を遙かに超えるほど巨大で果たして刃と呼んでよいのか分らないほどに長大で禍々しかった。

ギーシュの四肢を切断しようとするメガトロンに取り縋る一人の少女がいた。

「や・・止めて!! 彼を殺さないで!! お願い!!」
そう叫び声を上げギーシュを抑えつけるアームに何かが飛びかかる、それはギーシュの恋人であるモンモランシ-であった。

二股を掛けられても彼に対する愛情は揺らいではないのであるろうか。

ギーシュの延命を必死の形相で叫ぶモンモランシ-。

しかし、メガトロンは意に介さない。ギーシュを一刀両断にしよう
と 刃を振り上げる。

「やめなさい! メガトロン! お願いだから彼を殺さないで!」

ルイズはドクターによる治療を受けながらメガトロンに懇願する。

「何故だ!! 主よ、主はこの虫に殺されかけたのだぞ!!」

「メガトロン、これは決闘よ。ラヴィツジに手を出さないでとお願いしたのも私。」

「この怪我も決闘によって生じたものよ、彼に非はないわ。」

メガトロンはルイズの命に従って武器を収めた。その様子を見守っていたルイズはメガトロンに声を掛ける。

「でも・・・ありがとう、メガトロン。また助けられちゃったわね。」

ルイズは微笑みながらメガトロンに謝辞を述べた。彼は、主を守るのには当たり前だと述べると再びヴィークルモードに変形して離陸し、広場を後にする。

こうして、ギーシュとルイズの決闘は終了した。この決闘の後にルイズをゼロと罵るものは学院には一人もいなくなっていた。

第七話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第七話

トリストイン魔法学院から南へ5リーグの森の中、パンツという小気味の良い音が周囲に響く。森の中にある広場には、桃色がかったブロンドの長髪・鳶色の瞳を持った小柄な少女と一匹の巨大な獣、そして身の丈10メートルを超える巨大なゴーレムがいた。獣は心配そうに小柄な少女を見守り、巨大なゴーレムは己の土管のように太い腕を振るって何かを少女に説明しようとしている。少女は明らかにオーバーリアクション気味なゴーレムの説明を真剣に聴き入っていた。

「主よ、もつと腰を落として重心を下げるのだ。」

「こ・こ・こつかしら」

「そうだ、目線は前方に固定しろ。ターゲットから目を離すな。」

「腕が震えているぞ！！主よ！どうしたというのだ。」

小柄な少女、ルイズは己の両手で持っている小さな鉄の塊に更に力を込め、5メートル離れた位置に置いてある木を削りだして作られた的に向かって引き金を引いた。

その塊から射出された何かは一瞬で的を射貫きその先にある地面に突き刺さった。

「や・・やったわ！！メガトロン！！当たった！当たったわよ！！」
ルイズは諸手を揚げて喜んでいいる。

「うむ。主よ、よくやった。だが、まだまだだ。」

「最低でも30メートルは離れた位置にある的を射ぬけるようになれば実践では使い物にならん。」

「加えてあれは、静止している的だ。戦場で木偶のように佇んでいる敵がいるか？」

「咄嗟の判断力も必要だ。いつ、どこで敵が狙っているとも分らん。道のりは長いぞ。」
耐えられるか？ゴーレムは暗にそう問うているのだろうか。しかし、ルイズは嬉々として叫び返す。

「望むところよ！メガトロン。さあもつと練習しましょう！！」
そういつてルイズは、それを構えなおす。その鉄塊は洗練された美しいフォルムをしていた。

円柱状の穴が5つある部品が独特の形をしたフレームに覆われている。

砲身は全長で5 سانتほどであろうか。小柄なルイズの手のひらにフィットした持ち手には赤くごつごつとした皮がまかれている。

スミス&ウエッソンM36-10 回転式拳銃に酷似した武器を握った彼女は自身の使い魔に銃撃練習の続きを促した。

時は少し遡るー

ギーシュとの決闘の翌日、ルイズは自身の右腕に巻かれた包帯を外しながら窓外にいる自身の使い魔に話しかける。

寮塔の三階に位置している彼女の部屋は本来であれば何者も覗きこむことは出来ない。

しかし、10メートルを越える体躯を有しているメガトロンには関係の無い話であった。

「だから、大丈夫よ！メガトロン。ほら！もう治ってるから」

「ドクターの治療つては凄いわね！！もう後も残ってないわ。」

昨日までルイズの腕には酷い打ち身や打撲痕が散見されていたが、ドクターの治療を受け今日にはすっかり完治していた。

(余談だがドクターの手腕を見たところ水属性治療師は衝撃を受け、修行の旅に出発してしまつたらしい。)

ルイズは腕を振って自身の健全性をメガトロンにアピールするも、彼の表情は苦渋に歪んでいた。

「主が危機に瀕しているにも関わらず傍に控えていないとは・・・
使い魔失格だ。」

「主よ、不甲斐ない俺を許してくれ」

「メガトロン・・・私はあなたに感謝こそすれ、恨んでなんかいないわ。だから頭をあげて頂戴・・・そうじゃなきゃラヴィツジも居たたまれないわ。」

とルイズは部屋の隅で縮こまっているラヴィツジを指して言う。メガトロンはラヴィツジに楽にしてよい、と言うと再びルイズと向かい合う。

「主よ、これを受け取ってほしい。」

「?」「これは何?」

「予めドクターに造らせておいたものだ。先日のこともある。これから必要になるだろう。」

それは小さなイヤリングであった。

横2 سانت縦5 سانت程度の黒い薄板状の物体がアクセサリとして付属しており、華美な装飾は施されていないが上品で落ち着いたデザインをしている。

ルイズはメガトロンの巨大な右手からそれを受け取って言う。

「ありがとう!!メガトロン。中々センス好いじゃない。これ、一体どうしたの?」

「身に着けてみてくれ、主よ」

「いいわよ。」

ルイズはイヤリングを右耳に取り付けると振り返る。

「ど……どうかしら。似合う?」

『主よ、聞こえるか?』

「!」

ルイズは驚いた。目の前にいるメガトロンは何も喋っていない。代わりに己の身に着けたイヤリングから音が聞こえるではないか。

「メ……メガトロン!!これは何なの?」

「簡易の小型双向無線機と言ったところだ。」

「半径数百リーグであればいつでもどこでも通話することが出来る。」

「

「加えて主の居場所もそれがあれば特定することが出来るだろう。」

これで直ぐにでも主のもとに駆けつけることが可能になる。」

「よ、よく分らないけど、す……すごいわね、これ」

ルイズはイヤリングを触りながら呟いた。

「ね……ねえ、メガトロン!」

「どうした?主よ。無線機に不具合でもみつかったのか。」

「ち違うわ!!そ……その、だから……えっと……」

「?」

「そ測量わ!!測量はおわったの!?メガトロン」

「まだだ、北、そして南のデータを少し採取せねばならない。」

「そ!それだったら!!わ!私も連れて行きなさい!!メガトロン。」

今度はちゃんと空を見てみた。いのよ!!」

「授業はいいのか?」

「構わないわ!!少しくらい大丈夫よ!」

「いいだろう、主よ。都合がいい。」

「都合ってどういうこと?」

「見れば分かる。」

メガトロンは外着に着替えたルイズを掌に乗せると慎重に地面に降りた。そしてヴィークルモードに変形する。

「メ！メガトロン！！これってもしかして！！」

「コックピットだ。主を伴うためには必要だと判断した。」

ヴィークルボードとなったメガトロンにはコックピットが装備されていた。砲台の基部にあたる部分にはアクリルのような湾曲した透明板が見られる。内部には一つの座席と幾らかのスペースが両隣に設けられていた。

「さあ、ラヴィツジ、そして我が主よ。乗ってくれ。」

「ええ、お願い！！メガトロン、私を空の旅に招待しなさい！！」

「了解した、主よ。」

そして、ルイズを乗せたエイリアンタンクは雲一つない晴天の空へと向かって離陸した。

第八話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第八話

6千メートル級の山々が連なる火山山脈、ライカ樺と呼ばれる落葉樹を中心とした植物が多く群生したゲルマニアとの国境を埋め尽くす大森林地帯。

荘厳な雄姿を誇る浮遊大陸アルビオン。

ルイズはヴェイクルモードに変形したメガトロンに乗って自然あふれるハルケギニア大陸の景観を存分に堪能していた。

彼女だけでなく傍らに控えたラヴィツジも物珍しいのか落ち着きなく空からの景色を眺めている。

座席のシートや緩衝材に成火竜から剥ぎ取った骨や皮が使われているとメガトロンから聞かされた時は頭を抱えた彼女だが、今では無邪気な子どものように空の旅を楽しんでいた。

「メーメガトロン！！あっちよ！あっちに向かって飛びなさい！！」

「広い・・・こんなに海は広がったのね・・・」

「み！見て！！メガトロン！野生のヒポグリフの群れよ！！大発見だわ！！」

「ち！ちよつと！メガトロン？！火竜の群れに襲われちゃってるじゃない！大丈夫なの？！」

「え？駆除する？！ 駄目よ！！これ以上殺しちゃダメ！！いい？！分かった？！」

メガトロン一行は複数のトラブルに見舞われたが概ね順調に旅程（ほぼルイズの気まぐれだが）をこなしていた。

ルイズも興奮した面持ちで旅を楽しんでいたが、数時間もすると落ち着きを取り戻したのかゆったりと窓外の景色を眺めるようになる。

『主よ、満足したか』

「ええ、メガトロン、最高よ。あなたは優秀な使い魔だわ。」
『この程度であれば何時でもご覧にいれよう。』
メガトロンとルイズはイヤリングを通して言葉を交わす。自身の使い魔と言葉を交わす彼女の表情は満ち足りていると同時にどこか寂しげであった。
ルイズは地平線の果てまで続く広大な砂漠を物憂げに眺めながら考える。

私はなんて弱いのだろう、と。

誇れるような主になる、と大見得切ったにもかかわらず、使い魔に心配をかけるだけの己が嫌になる。ギーシュのワルキューレが一方的に自身を攻撃する中、ラヴィツジはどのような思いで爪を打ち鳴らし、牙を剥いていたのだろうか。

ルイズは座席の横で丸くなっているラヴィツジに手を乗せると優しく撫で始めた。

もしラヴィツジがああ決闘に介入していれば自身は何の労力もなく勝利を手にすることが出来ただろう。この獣は己が苦戦したあのゴレムたちを容易く引き裂き、噛み砕くのだろうか。

否、雑兵には拘わずにメイジ本体であるギーシュの息の根を真っ先に止めていたかもしれない。

「強くなりたい。」
ルイズはぼつりと呟いた。

「強くなりたい。」
先ほどよりも大きい声だった。

「強く！！強くなりたいたい！！！」

「強くなつて貴方達と一緒に戦いたい！！」「守られるだけじゃなく貴方たちを守りたい！！」

「私は！！私は強くなりたいたい！！！」

それはゼロと蔑まれ続けてきた一人の少女の心からの叫びだった。相手を見下し、嘲笑う醜い感情に一人立ち向かっていた彼女は強い心を持っている。

今まで通り一人であれば傷つけられるのは彼女だけだった。

しかし、今の彼女は一人ではない。

彼女を守る使い魔がいる。

彼女を信頼するしもべがいる。

彼女を思ふ友達がいる。

強い心を持つ彼女は己の無力さによって仲間が傷つくのをただ黙って見ていることは出来なかったのだ。自身の主の心からの叫びをメガトロンとラヴィッツは何もせず黙って聞いていた。

メガトロンはルイズに問う。

『主よ、その言葉に嘘はないか。』

「ないわ。」

ルイズは即座にメガトロンの問いに答えた。

その声は貴人のように高尚な気風を有し、凜とした彼女の雰囲気からは雑念の類は一切感じられない。

『そうか・・・了解した、主よ。』

『俺は魔法とやらのことは分らない。だが、違う領域からであれば

主をサポートすることが出来る。』

『ドクター。あれを主に。』

「はい、メガトロン様。ルイズ様、これをお受け取りください。」
スカルペルがラヴィッツの胸部格納庫から出てくるとルイズに何かを差し出した。

「？」 「メガトロン。これは何？」

『主だけのための、武器だ。』 『明日から主には幾つかのメニューをこなしてもらおう。』

「これが・・・私だけの武器。」
ルイズはスカルペルから渡されたそれをじっと見つめていた。するとメガトロンから通達を受ける。

『主よ、日没予定時刻まで一時間を切った。帰還するぞ。』

「分ったわ、メガトロン。・・・また私を空の旅に招待しなさい。

ぜ！絶対だからね！！分かった？！！」

『いいだろう、主よ。必ずだ。』

この日初めて、ルイズは自身が生涯に亘って使い続ける一つの武器を手に入れた。

第九話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第九話

ハルケギニア大陸の漫遊旅行から帰還したルイズは翌日から様々なトレーニングに取り組むことになる。

基礎的な体力トレーニングから銃の分解・メンテナンスなどメガトロンがルイズに課した訓練は多岐に亘った。

授業が始まる前の早朝、終わったのちの放課後等の比較的自由な時間帯に訓練は行われたのだが、

決して楽ではないそれらの訓練を彼女は歯を食いしばり、時には泣き出しそうになりながらも必死でこなしていく。

しかし、不思議と彼女から泣き言の類は一切発せられなかったという。

ギーシュとの決闘から数日後、ルイズは休日である虚無の曜日を利用してラヴィッジとの模擬実践訓練を行っていた。

右手で銃を構えたルイズは木陰に己の身を隠して辺りの様子を伺う。ルイズの勝利条件はラヴィッジの腰に取り付けられた木製の的を打ち抜くこと。逆にラヴィッジの勝利条件は的を射貫かれずにルイズの背後を取ることだった。

本日既に何度もラヴィッジに敗れている彼女は今度こそはと、鼻息を荒くする。

「（・・・ふふふ、見つけたわ、ラヴィッジ。頭隠してなんとやらね。）」

ルイズは樹木の淵から覗いているラヴィッジの尾を見つけて会心の笑みを浮かべる。ゆらゆらと揺れている尾に変化がないことを確認

すると腰を落として駆け、対象までの距離を一気に縮める。

(主よ、トリガーを引くときは必ず二回だ。)

(一発目はターゲットへ向けて。)

(二発目は一発目の半径3センチメートル以内に間髪いれずに続けて撃ち込め。)

メガトロンの助言を脳内で反芻しながらルイズは銃を構える。

「捕まえたわ！！ラヴィツジ！！」

ルイズは木陰に回り込むと銃を突きつける。

「！！！！」

しかし、そこにいたのはラヴィツジではなくホログラフ映像を照射しているスカルペルがそこにはいた。

スカルペルはルイズを己の視界に確認すると照射していた尾の映像を停止する。

彼女は辺りを見渡してラヴィツジの所在を伺うが、カチンツという音が自身の背後から発せられるのを聞いて両手を挙げる。

「・・・参ったわ。」

ラヴィツジとの模擬実践訓練は通算10戦10敗でルイズが負け越していた。

「ね、ねえ。んつメガترون。あ…あつ」

「わ私、少しは強く、はひゃうっ！！、な、なれたかしら・・・」

訓練後、ルイズはドクターによるアフターケアとしてのマッサージ

を受けながらメガトロンに自身の現状に問うていた。
健康な有機生命体の雄であれば間違いなく前屈みになるであろう声がルイズから漏れ出ていたが、金属生命体である彼は全く関知せず
に質問に答える。

「以前と比較すれば格段に進歩していることは間違いない。」

「だが、あくまでもそれだけだ。」

「銃撃精度や身体能力は訓練すれば向上する。しかし、主には絶対的に経験が足りていないのだ。」

「先の訓練でもそうだが、視野が狭すぎる。敵は前後左右上下どこからでも狙ってくるのだ。前方だけを注視しては即、死に至るぞ。」

メガトロンからの厳しい批評を聞いたルイズは俯き落ち込んだ様子を見せる。それを見た彼は更に言葉をつなげた。

「主よ、焦るな。焦ったところで事態は好転しない。己の現状を正確に把握してからがスタートラインだ。」

「あまつさえ、どのような敵が立ちはだかろうと我々が駆逐する。主が心配することは何もない。」

「あなたと相対する敵の方に同情したくなるわね。」

拳を握りこみながら話すメガトロンに対してルイズは言葉を返す。

それは己の使い魔の強大さを知っているが故に発せられたのだろう。

事実、ルイズの認識は概ね正しい。

しかし、彼女は己の抱いていた認識が甘すぎることを後に嫌というほど思い知らされることになるが。

「ルイズ様、マッサージが終了しました。もう起き上がったてもよろしいですよ。」

スカルペルは俯せていたルイズに話しかけるとぼきぼきと指を鳴らす。

「ん、んん〜！はあ。ありがとう。とつても気持ちよかつたわ。」

ルイズは起き上がると身体の調子確かめるように伸びをする。身体の凝りが驚くほど解れたのかルイズは何かを確信したかのようにスカルペルに喋りかけた。

「ドクターあなたお店でも開けば間違いなく流行るわよ。私が保証するわ。」

「さあ、ラヴィツジ！続きをするわよ。revenge is mine!!!」

銃を構えたルイズは訓練の継続を促す。やや血走った目をした今の彼女であれば大型の空母でも撃沈できるのかもしれない。気焰万丈な勢いはそのままにルイズはふと疑問に感じた事柄を自身の使い魔に尋ねた。

「そういえばメガトロン。どうしてこの広場に来る時、わざわざ遠回りをしているの？」

ルイズはヴェイクルモードのメガトロンが、毎回異なるルートを巡ったうえで広場に向かうことを思い起こしながら彼に問う。

メガトロンは真剣な面持ちでルイズの質問に答える。

「他の人間に主の武器の存在を知られないようにするためだ。」

「その武器はドクターが造ったものだ。この世界の人間が保有している技術水準では考えられないほどに優れている。」

「そんな物を主が保有していると周囲の人間が知ればそれはまず問

違いなく接收されるだろう。」

「もしくは主に迫り、量産化を企む輩が出てくるかもしれない。そうでなくても主の身に何らかの危害が及ぶ可能性がある。」

「主の周りにおける未確認要素は出来る限り排除しておきたいのだ。」

「主よ、主も周囲の人間にその存在を気取られることがないよう気を付けてくれ。」

メガトロンの説明を聞いたルイズは右手に持っているそれをじっと見つめる。

小柄な少女である彼女でも自由に持ち運ぶことが出来る携帯性、加えて一度に五発までの銃撃が可能である高い攻撃性能を持つそれは、確かにここハルケギニアでは類を見ないほどに優れているのだろう。

魔法が普及しているハルケギニア大陸でも銃という物の存在は確認されている。しかし、単発式であることや装填に時間がかかること、重量があり運搬に不向きであるなど複数の欠点があるため戦闘には積極的に用いられてはいない。

魔法という簡易で利便性が非常に高い技術形態が科学技術の発達を阻害している環境では銃を始めとした武器の改良が進まないのも致し方ないことだろう。どこかの禿げた中年の教師にでも見せれば有する技術的先進性から興奮のあまり残り少ない彼の毛髪は全てはじけ飛んでしまいかもしれない。

もしこの武器が量産され大衆に出回ったらどうなるのか、彼女はブルツと体を震わせると己の思考を打ち切る。

そして自身の使い魔からの勧告にしっかりと頷き返した。

「分かったわ、メガトロン。この武器の存在は誰にも教えない。知っているのは私と貴方たちだけよ。」

「さあ、ラヴィツジ。続きよ続き。次こそは勝ってみせるわ。」

ルイズの催促にラヴィッツは寝かせていた体を持ち上げて応えるが、何かを発見したかのように一瞬で体を反転させる。

そしてルイズのいた場所から対角線上にあたる森に向けて後脚部に設置された一対のガトリングガンの照準を合わせるラヴィッツは低い呻り声をあげて矢庭に警戒心を露わにする。

気が付けばメガトロンも沈黙のままに右腕の砲口を翳していた。

「・・・メ、メガトロンどうし」そこにいるのは分かっているぞ!! 虫どもめ。姿を現せ!!」

ルイズの声を遮ってメガトロンの怒声が飛ぶ。

すると複数の人影が木陰から転げるようにして現れた。

「ギ、ギーシュ！キュルケに、どうしてタバサまで!!」

現れた人影はルイズの同級生であるキュルケ達であった。彼女たちはきまりが悪そうな様態でルイズ達の元に歩み寄る。

「またこの虫か！いいだろう、挽肉にしてやる。」

「まっまままま待つてくれ!!話を聞いてくれ!!お願いだ!!」物凄い風切り音をあげながらモーニングスターを振り回すメガトロンに対してギーシュは必死の形相で懇願する。

話を聞くと彼はルイズに対して件の決闘について謝罪をしたいのだという。

そのためにルイズ達一行の行き先の後を辿ってここまで来たのだと話すギーシュの謂いを聞いたルイズは半ば呆れながらも彼の謝罪を受け取っていた。

「それだつたらもつと早く私に言いなさいよ。そんな付け回すような真似をせずともよかつたじゃない。」

「そ、それもそうだね・・・あはは。」

「どうせルイズの使い魔が怖くて言うに言えなかつたんでしょ。こ

のへたれ。」
キュルケの突っ込みに心を抉られたギーシュは両手をついて頂垂れていた。落ち込んでいるギーシュをほったらかしてメガトロンは残る二人の少女に問う。

「小娘ども、貴様たちは何故ここにいるのだ？」

「私はただギーシュがこそそこそと動きまわっているのをみて面白そうだったからついてきたのよ。深い意味はないわ」

「まあ、黙って見ていたのは確かに悪かったわね。謝るわ。」

というときュルケはルイズに軽く謝罪する。タバサはというと真剣な面持ちでメガトロンを見つめていた。

「私にもそれを教えて欲しい。」

「……!!」

驚きの声が周囲から漏れる。タバサの言うそれとは間違いなくルイズの持っている銃のことを指しているのだろう。

「タ、タバサ?! あなた何を言っているのか、分かっているの?」

キュルケはタバサの正気を伺うように彼女に尋ねる。しかし、タバサの表情は真剣そのものだ。

「主よ、この者たちに武器の存在を知られてしまったようだ。」

「これ以上の拡散を防ぐ意味でもこやつらを消してしまおう。」

「ばっ! ばか……!! 何言ってるのよ!! あんたわ!!」

メガトロンの右腕からブレードが展開されているのを見てルイズは叫ぶ。

放っておいたら己の使い魔はここにいる三人を殺してしまう。

そんな危惧が彼女の中に燻っているのであるうか、ルイズの叫びは悲壮な色を帯びていた。

残りの二人にしてもこの程度のことですら殺されてしまったては堪ったものではないだろう、キュルケに至っては完全なとぼっちだ。

決闘の際の恐怖が蘇ったのかメガトロンの宣告を聞いたギーシュは既に白目を剥いて気絶している。

一方、原因を造りだした張本人であるタバサはメガトロンから殺すという脅迫を受けてもいたって冷静だ。

「私達を殺せば学院で騒ぎになる。得策ではない。」

「ほう、ならば得策とは何だ？」

武器を翳しながらメガトロンはタバサの声に耳を傾ける。

「秘密は順守する。誰にも言わない。これで解決。」

「.....」

「いいからメガトロン！ さっさとそれ仕舞なさい！！」

難しい表情をしながら黙考するメガトロンに対してルイズは声をあげる。

こうしてる間にもモーニングスターは振り回され、ブレードは目の前にいる3人の人間を切り裂かんと翳されているのだ、

主であるルイズも気が気でないだろう。彼女の命が届いたのかメガトロンは武器を収める。

「貴様たちが情報を漏らさないと確約できる根拠はどこにある。」

「無い。私は約束することしか出来ない。」

「だから情報が周囲に漏洩していることが確認された時、改めて私を消せばいい。」

いっそ冷徹ともいえる自己分析にメガトロンは舌を巻く。先ほどから彼はタバサの述懐に虚偽があれば即座に彼女を殺害する算段をたてていた。

しかし、メガトロンは彼女の体温・拍動・瞳の収縮具合などの身体データから彼女が嘘をついていないことが分かってしまっていたため

思惑が外れ、手を出せずにいたのだ。

「で、でもどうしてタバサはこれを習いたと思ったのよ。」

「私は強くなりたい。そのためであれば何でもする。ただ、それだけ。」

ルイズの問いにタバサは事もなげに答える。

その際のタバサの眼をみたメガトロンは奇妙な既視感をその身に抱いた。

まるで鏡あわせの自分を見ているかのような、

水面に反映された己と同じ何かを瞳に写した時のような、

そんな感覚はメガトロンをしばしの間支配したが、ルイズの呼びかけによつて彼は思考の海から再び覚醒する。

後に彼は悟ることになるが、深い憎しみと力への渴望を宿した彼女の瞳はエネルギーの塊であるオール・スパークを得る為は何百体も
の同胞を虐殺したかつてのメガトロンと同じ光を放っていた。

虚無の曜日同日同時刻、ルイズ達がメガトロンと生死の境を決定する問答を繰り返していた頃

緑の髪が美しく伸びた妙齢の女性と禿げ散らかした中年のおっさんが廊下で四方山話に興じていた。

現代日本であればまず間違いなくセクシャルハラスメントとして道行く人に通報されているだろう。独房にぶち込まれ悪ければ彼は極刑に処せられるのかもしれない。

窓から射す光が彼女の長い緑髪を輝かせている。彼女はトリスティン魔法学院の学院長であるオールド・オスマンの秘書を務めているミス・ロングビルという名の女性だ。

中年のおっさんはミスタ・コルベール。図書館からの帰りであろうか彼は幾つかの書籍をその手に所有していた。

二人はにこやかに時には笑いも交えて会話を行っている。

「いやあそれにしてもミス・ロングビルはお若いのにとっても博識ですなあ」

「研究熱心な先生にはとても敵いませんわ。もっと色々なお話を聞かせてくださいさらないかしら？」

ロングビルの言葉に気をよくしたコルベールはより彼女の気を引こうと饒舌に語る。

彼女はコルベールの話に相槌を打ちながらも時折質問を返し、会話を盛り上げていた。

「そういえばミスタ・コルベール、宝物庫のことはご存知？」

「貴重で価値のある、もしくは危険性があるマジックアイテムを封印している倉庫ですな。それがどうかされましたかな？」

「ええ、あの場所にはあまりにも嚴重に固定化や対魔法の術がかけられていると小耳にはさみまして、中には一体何があるのかと少し興味がありましたの」

コルベールはロングビルの期待に応えようと記憶を探り、かつて宝物庫に入った際に見分した品々を紹介していく。

彼の話聞いた後の彼女の瞳は妖しい光を放っていた。

「確かに、そのような品々が保管されているのであれば、あれほどの嚴重な管理も頷ける話です。」

「盗難の被害に遭うことなど有り得ないのでしょうかね。」

「ふむ、一見すればそうなのですが、私にはそうは思えないのですよ」

「まあ、どういう意味です？ ミスタ・コルベール」

そして、コルベールは以前宝物庫に入室した時に感じた宝物庫の弱点についての自説を話し始める。

ロングビルはいかにも興味津々といった風に聞き入っていた。

「あの扉は魔法に対する対抗措置にばかり傾注していて、物理的な衝撃に対する予防をおろそかにしているような気がするのです。例えば……」

熱心に己の見解を喋り続けるコルベール。

コルベールが話を終えるとミス・ロングビルはにこやかに笑って答える。

「とても興味深い話でしたわ、ミスタ」

会話を続けながら二人はその後も学院の廊下を連れ立って歩いていた。

第十話 (前書き)

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第十話

後のルイズやキュルケによる説得の甲斐もあつて渋々であるがメガトロンは3人の殺害を撤回することとタバサにも銃撃の教授を施すことを了承した。

「主よ、何故この小娘にも銃を教えねばならぬのだ。」

「いいじゃない、メガトロン。減るわけでもないし、それに……
・強くなりたいてっていう気持ちは痛いほど分かるから。」

無然とするメガトロンを宥めるようにルイズは話しかけるが、彼は未だに納得はしていないようだ。

その表情からはタバサという青髪の少女に対する不信感がありありと窺い知れる。

そんなタバサはラヴィツジとうまが合ったのか何故か睨めっこをしていた。

美少女と獣、中々にシュールな光景だ。

「おい、その小娘。」

「……」（睨めっこ中）

「貴様だ！！貴様に言っている！！聞こえているのか小娘よ！？」

「何？」

激昂するメガトロンとは対称的にタバサの様子はいたって冷静だ。

「貴様の適性を判断する。魔法を使ってみせろ。」

「分かった。」

タバサはメガトロンの命令に素直に頷くと杖を構え呪文を唱えた。

「ウインディ・アイシクル」

彼女が呪文を唱え終えると無数の氷の槍が辺りに咲き乱れる。タバサが得意とする風系統の呪文に水の系統を重ねた氷の属性を持つ複合魔法だ。

メガトロンは己の顎に手を当てながらタバサが放つ氷槍を見つめていたがしばらくすると興が冷めたかのように頭を振る。

「ふん、この程度か。くだらん。」

「ちょっと！メガトロン！！口が悪いわよ。」

「主よ、俺様は本心から述べたまでだ。口に年貢は掛からん、俺様がどのように評価しようが自由なはずだ。」

「心配せずとも命は守る。安心してくれ、主よ。この小娘用の武器はまたドクターに造成させる。数日の内には出来上がるだろう。」

己の使い魔による遠慮ない劣評にルイズは口を尖らせるが、彼は落ち着いて己の主に向けて答えを返した。

そして、メガトロンはルイズの隣に立っているタバサに向き直ると言葉を掛ける。

「小娘よ。完成次第、貴様に渡してやる。それまで待っている。」

「感謝する。」

普段から感情の起伏を表に出すことが少ないタバサの表情には僅かながらも与望の色が垣間見えていた。

「主よ、今日の訓練は終了だ。帰還するぞ、乗ってくれ。」

「分かったわ、メガトロン。今日も色々教えてくれてありがとう、また一歩強くなれたような気がするわ。」

「当然だ、何といってもこの俺様が直々に教鞭を執っているのだから。上達せん訳がないわ。」

キュルケやギーシュ達が広場を後にしたのもトレーニングメニューを続けていたルイズはメガトロンの促しに従ってトリステイン魔法学院へと向かうべくヴィークルモードとなったメガトロンの乗込みもつとしていた。

コックピットの座席についたルイズに対してメガトロンは神妙な様子で話しかける。

『主よ、武器を他者に供与するなどといった向う見ずな行為は今後出来る限り控えてほしい。』

『このような行いが続けば主の周囲における安全保障上の機密管理に致命的な毀損が生じかねんだ。』

「分ってるわ、メガトロン。分ってるわよ。でも……やっぱり黙って見ていることなんて出来ないわ。」

「何故強くなりたいのか、その理由は分らないけれど、彼女の……タバサの抱いている感情は紛い物なんかじゃない。」

「あの時何でもすると言ったタバサからは、決然とした意思と燃え盛るような憎しみを確かに感じたのよ。」

ルイズはイヤリングから聞こえる使い魔の声に応えながら広場におけるタバサのことを思い返していた。

凍てついた目をした少女はどのような思いをその胸に抱いているのだろうか、ルイズは少々の葛藤の後に己の使い魔であるメガトロンの意を決して話しかける。

「ね、ねえ……メガトロン。」

『何だ？主よ。』

歯切れの悪いルイズからの問いかけを聞いたメガトロンはその先を促す。

「お願いがあるの……聞いてくれるかしら。」

『構わない、何でも言ってくれ。』

『俺様は主の使い魔だ。主の願いを叶えるのは使い魔の役目だろう、遠慮することはない。』

「うん、ありがとう。あのね……」

メガトロンの促しを受けてルイズは頼みごとの内容を話し始める。

『何だと？！何故そのようなことを俺がせねばならんのだ！！』

『正気は大丈夫か？！主よ、どうか考え直してくれ！！』

ルイズの頼みごとを聞いたメガトロンは先程とは一変した態度を露わにする。ルイズに再検討を促す彼の声にはどこか哀愁の感情が漂っていた。

使い魔からの必死の陳情を聞いた彼女はやや尻込みしていたがそれでも己の主張を撤回することはしなかった。

ルイズは更に言葉を重ねてメガトロンの懇願する。

「お願い、メガトロン。これはあなたにしか出来ないのよ。」

「こんなことを頼めるのもあなただけ、私じゃあ相手にすらならないわ。だから、だからお願い。」

『………了解した、主よ。その任務承った。』

『だが！！あくまでも最優先事項は主の護衛だ。これだけは譲歩できん。』

『任務は任せろ、主の命は必ず俺が完遂する。主が余計な気を回すことは何もない、安心してくれ。』

しばし、メガトロンは煩悩していたが気を改めるようにしてルイズのお願いに対する答えを返した。

「ありがとう、メガトロン。あなたが私の使い魔で本当に良かった。」

ルイズは眦にややうれし涙を溜めながら己の使い魔に感謝する。
彼女を乗せたエイリアンタンクは地平線に沈みゆく太陽を背景に魔法学院に向けての飛行を続けていた。

小柄なルイズよりも更に小さい少女の青い瞳にはおよそ年齢に見合
わないであろう様々な感情が宿っている。

増悪、怨毒、悔恨、怨嗟

それらの負の感情は心を蝕み、精神を侵食し、憎しみのままに生きる彼女の強力な糧となり少女を支えていた。

とある男の手によって父親を、母親を、果てには自分自身の存在すらも奪われてしまった少女は何を思い何を為そうとしているのだろうか。

ルイズではその一端を垣間見ることすら出来ない圧倒的な絶望を抱えた少女にはこれから先、幾多の試練と様々な困難が待ち構えている。

青い瞳を持つ少女、タバサはそれらの艱難辛苦を一人孤独に、或いは大切な仲間とともに克服し、乗り越えていくことになる。

が、それはまた別のお話。

ここではないどこかで語られる物語は少女が憎しみから解き放たれる一つの過程、

孤独な少女が得難い仲間と大切な友人を手に入れる一つの成長譚。

いつか来る未来、少女は偽りの己を捨て、本当の自分を取り戻す。

第十一話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第十一話

土くれのフーケと呼ばれ、トリステイン中の貴族にとって恐怖の的となつているメイジの盗賊がいる

その盗賊が用いる盗みの手法は錬金の魔法を使って頑強な扉や壁をただの粘土や砂に変えてしまうことだ。

宝物を守る防壁を無力化した後に易々と侵入し、目的の品を奪い取る。

例え防壁が固定化や硬化の魔法で守られていようが、強力な錬金の魔法を使って打ち破り、防壁を土くれへと変えてしまう。

それ故にその盗賊には土くれという冠名が自然と付いて回るようになった。

身の丈およそ30メートルの巨大なゴーレムを操って盗みを行う時もあるため、その盗賊はトライアングルクラスに位置する強力な土系統のメイジであるといわれている。

しかし、それ以上の正体は誰にも知られておらず、全貌は謎に包まれている。

盗みを行った犯行現場の壁には己の犯行であることを誇示するサインを残していくという貴族をあざ笑うかのような行動をとることもトリステインにおけるフーケの認知度が高まる一助となつている。貴族を毛嫌いする平民の中では貴族がフーケによつて面目を潰されていることを皮肉った小噺が流布しているくらいだ。

支配層に位置しているプライドの高いトリステインの貴族たちが土くれのフーケに対して抱く憎しみの感情も一角のものだろう。

現状のトリステインにおいて土くれのフーケは最も有名な盗賊であると言える。

同日深夜、蒼と紅の双月がハルケギニアの景観を彩っている時分、トリステイン魔法学院敷地内に建立されている本塔の前に一つの人影が現れた。

頭部が隠れるようにすっぽりと黒いフードを被っているためその人物の表情や性別を窺うことはかなわない。

それは辺りを見渡すようにして人の目が無いことを確認すると片膝をおり両手を地面に接触させる。その両手が大地に触れた途端、異変はおこった。

地面がもりもりと隆起してあつという間に巨大なゴーレムがその場に構築されたのだ。ゴーレムはその巨腕を振りかざして拳を塔の壁に叩きつけた。

本塔の壁が一撃で崩落しないことを確認したゴーレムは連続して拳撃を浴びせ続ける。

ガズウウン・・・ガズウウン・・・

固いモノ同士がぶつかり合う特有の重低音が辺り一帯に響く、

その音を聞きつけた当直の警備兵は各々が剣や槍を持ってゴーレムの元に集結し、

本塔を護衛しようと武器を構えるが

30メートルもある巨大なゴーレムに魔法も使えない平民の兵士が對抗できるはずもなく、

奮戦むなしくも鎧袖一触で彼らは叩き伏せられてしまった。

兵士たちから発せられる悲鳴や拳撃によって生じた破砕音を聞きつけいち早く現場にルイズが駆けつけた時には、巨大なゴーレムは大きな音や振動とともに

胸に何かを抱えて学院から去っていつてしまっていた。
負傷した兵士があげる呻き声や学院に所属している水属性治療師による搬送の指示が辺りに響く中、
一台の戦車と一匹の獣がその一部始終をじっと観測していたことを知る者はいない。

翌日のトリステイン魔法学院は蜂の巣を突いたかのような喧騒に包まれていた。

トリステインを揺るがしている盗賊『土くれのフーケ』の来襲。
固定化や硬化などの嚴重な防衛魔法がかけられてたはずの宝物庫が破壊。

保管されていた秘宝の強奪。
阻止しようとした兵士たちの負傷など、
まさに学院が創設されて以来の大事件であると同時に、過去に類を見ないほどの大きな失態でもあった。

「やはり、平民の兵士などに任せていたのが間違이었다のですよ、あれほど私が仰ったにもかかわらずに」

「今はそんなことを言っている場合ではないでしょう、憤みなさい」
「何だと・・・ええい！！静まれ、静まらんか！！話が進まんわ。」

学院長室では教師達が集まって今回の事件に関する対策会議が開かれていた。

多様な意見が噴出する中で、責任の所在の押し付け合いを行っていた教師を一喝して黙らせた

トリステイン魔法学院、学院長オールド・オスマンが口を開く。

「さて、うだつのあがらん様を見せてしまつてすまんが、ルイズ・フランソワーズ。君を呼びつけた理由は他ならぬ土くれのフーケに関することじゃ。」

「君は当直の兵を除けば誰よりも早く現場に駆けつけたそうじゃが、昨夜見聞きしたことをなんぞ説明してはくれないかの？」

「当直の兵士からは話を伺わないのですか？」

居並んでいる教師の中から声が飛ぶ。

「生憎、兵士たちの負傷は深刻での。まともに事情を聞くことができる状態の者が一人もおらんかつたほどなのじゃ。」

オスマンの言葉を聞いた教員の人々は顔を顰める。オスマンの目線の先にはルイズとその使い魔である一匹の獣の姿があった。

寝不足気味なのか彼女の目はやや充血している。

彼の命に従いルイズは昨日の夜に己が現場で見たことを詳しく説明した。

人間の悲鳴や轟く重低音を耳にして何事かとベッドから跳ね起きたこと、

悲鳴の出所を探し出して本塔へ駆けつけた時にはすでにゴーレムは学院から遠ざかっていたこと

学院から遠ざかるゴーレムの肩には黒いフードを被った人物が乗っていたことなど

昨夜の出来事を事細かに語るルイズ。それに対してオスマンは厳かに頷きながら彼女に言葉を返す。

「つむ、報告の中でも触れられていたがその人物が土くれのフーケで間違いないじゃろつて。」

「まさか魔法を直接使わずに力押しで宝物庫を破壊してくるとはの。」

対魔法用の魔術にばかり重点を置いていたことが徒になったようじゃ。」

悩ましい声をあげるオスマンに対して教員の一人が対応策を提案する。

「オールド・オスマン、王宮に連絡しましょう。王宮衛士隊を増援に呼べばフーケを捉えられるはずですよ。」

「ならん、そんなことをしていればフーケに気取られる、ぐずぐずしていれば盗まれた宝物ごととんずらされるのがおちじゃろつて。」
教員の出した提案を取り下げるとオスマンは傍に控えていた美しい女性に声を掛ける。

「のう、ミス・ロングビル。土くれのフーケに関する調査は如何ほどじゃな。」

オスマンの問いかけを受けてロングビルは掛けているメガネの蔓をきらりと光らせながら調査結果を話し始めた。

「はい、周辺住民の聞き込みから土くれのフーケと思しき者の足取りが掴めました。」

「とある農民からの情報によると近郊に位置する森の中でフーケらしき人物を目撃したものがいたそうです。」

「さすが、仕事が早い。ミス・ロングビル。」

満足そうな顔で労を労うオールド・オスマン。

彼は周囲を見渡しながら声を張り上げる。

「我々の手で盗まれた宝物を奪還し、盗賊によって汚された学院の名誉を取り戻すのじゃ。」

「我と思うものは杖を掲げよ!!!」

しかし、教員の中にはオスマンの声に応えるものは見られない。

「どうした、フーケを打ち取って名をあげようという貴族はおらんのか?!」

オスマンは慌てたような声をあげるが現状は変わらない。ルイズは周囲の様子をちらちらと伺ってはかりいる教師陣を見て堪らずに杖を掲げた。

ゼロという汚名を雪ぐためにもこの機会を逃すわけにはいかない、固い決意とともに杖を掲げるルイズは凜々しくも美しかった。

「私が志願いたします!!」

「おお!ミス・ヴァリエール。君が参加してくれるのか。さすがは優秀なメイジを多数輩出している誉れ高きヴァリエール家の息女じや。」

オスマンは志願者が名乗り上げてくれた安堵からか、喜びの声をあげる。

「では、ミス・ヴァリエール。君にフーケ追補の任を「ちよつとお待ちになって!!」

オスマンがルイズに命を下そうとしたとき一人の女性が学院長室の扉を開けて入室してきた。

「ツエ、ツエルプストー?!どうしてここに!!」

「ヴァリエールには負けられませんわ、私も任務に参加させていただきます。」

室内に入室したのはキュルケであった。

彼女は燃えさかるような赤い髪をたなびかせながら己の杖を掲げるとルイズに話しかける。

「あんただけじゃ心許ないでしょ。私も一緒に行つてあげる。」
「べ、べべべ別に嬉しくなんてないわよ！！お礼なんて言つてあげないんだからね！！！」
「素直じゃないわねえと呟きながらキュルケは一人ごちる、すると何時の間にか傍にいたのが彼女の横にはもう一本の杖が掲げられていた。

「タバサも付いてきてくれたのね、一体どういう風の吹き回しかしら？」

「二人が心配。」

キュルケの問いに青髪の少女、タバサは事もなげに応える。

「タバサ……ありがとう、あとでたっぷり愛でてあげるわ。」

「それは蛇足。」

「あ、あんたら真面目にやりなさいよ……」
キュルケの言葉に冷静に突っ込みをいれるタバサ。

そんな二人を見てルイズは嘆息するがその顔からは親愛の感情が染み出していた。

「うむ、ではこの三人にフーケ追補の任を頼むとしようかの。」

「ミス・タバサ、ミス・ツェルプストー、両者ともに優秀なメイジであると聞いている、ミス・ルイズと協力して必ずや宝物を取り戻してくれるじやろつ。」

彼女たちに激励の声を掛けるオスマン。

トリステイン魔法学院院长である彼は杖を掲げるとルイズ達に感謝の意を述べた。

「魔法学院は諸君らの努力と貴族としての誇りを評価する。」

「オールド・オスマン、私が案内役として同行いたします。」

「そうしてくれるか、ミス・ロングビル」

「もとよりそのつもりです。」
謝辞を述べるオスマンに自らルイズ達との同行を申し出るロンゲビル。

それを了承したオスマンに対してにこやかな笑みを浮かべた彼女は目の前にいる三人の少女と一匹の獣に話しかける。

「さあ皆さん行きましょう。表に馬車を待たせてあります。」
「それに乗っていけばすぐに」その必要はない』

「……えっ？」「」

突如として発せられた音に反応してルイズ達を除いた人々による驚きの声はその場に響いた。

キュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラー……
トリステイン魔法学院近郊に位置する森の中、一台の巨大な戦車が内部をはしる小道を進撃していた。戦車の両輪を担っている敵つくものものしいベルトが発する独特の鳴動が一带に響いている。森に生息しているらしい動物たちはその音を聞いて先を争うように逃げ出していった。

その戦車には三人の少女と一人の女性が思い思いの場所に腰かけており、目的地に到着するまでの暇を会話によって潰している。最初は渋っていたキュルケやミス・ロングビルもだんだんと慣れてきたのか己が戦車に乗車しているという事実に対しての動揺は見られない。

「何で土くれのフーケは盗賊なんかやっているのかしら」

「魔法が使えるってことは貴族なんでしょう？」
ルイズは自身が感じた疑問を話題に投じるとミス・ロングビルがそれに反応した。

「メイジが全員貴族であるという訳ではありませんわ、様々な事情で平民になった者も多いのです。」

「その中には身を賣して傭兵になったり、犯罪者になる者もいますわ。」

「かくいうこの私も貴族の位を無くした者ですから。」

「えっ、ミスロングビルはオスマン氏の秘書なんでしょう？」

ロングビルの告白にキュルケが重ねて質問を投げかける。

「オスマン氏は平民や貴族などの身分に拘らないお方ですから・・・では、どういった事情で貴族の名を？」

「・・・」

キュルケの問いに沈黙で返答するロングビル。

「いいじゃない、お聞かせ願いたいわ。」

「こら！！失礼よ、ツエルプストー！！」

「ちよっとお喋りしただけよ。深い意味はないわ。」

答えを催促したキュルケに対して釘を刺すルイズ。

二人は後も会話を続けていたが、重厚という文字をそのまま顕現したかのような戦車、もといルイズの使い魔であるメガトロロンが木々を容易くなぎ倒しながら驍進する様をみて口を噤んだ。
バキバキッという木々が倒壊する断末魔をまざまざと耳にしてキュルケはルイズに再び話しかける。

「・・・ねえ、ルイズ。」

「何よ。」

「私、フーケが少し可哀想に思えてきたわ。」

「奇遇ね、私もよ。」

「凄い。」

その時三人の少女の思いは奇しくも一致した。

「主よ、目的地に到着したぞ。」

「ありがとう、メガトロン。ミス・ロングビル、あれが目撃情報にあつたという廃屋ですか？」

己の使い魔の労をいたわつた後にルイズはロングビルに確認を求め
る。

森の中の小道が随分と広くなつて街道という呼称が適切になつた頃、
ルイズ達一行は目的地である廃屋に到達していた。

小屋の中から見えないよう、彼女たちは森の茂みに隠れながら小屋
の様子を伺っている。

「ええ、間違いありません「ラヴィッジ、やれ。」

バババツバツババババツ

ロングビルの返答も待たずにメガトロンは部下であるラヴィッジに
命令を下す。獣の後脚部に取り付けられている一対のガトリングガ
ンから無数の弾丸が連続して発射される。

毎分2000発という速度で放たれる7、62×51mm弾が目の
前に建てられた廃屋を見る見るうちに破壊していった。

ルイズ達には弾丸の発射速度が速すぎて銃身が火を吹いているよう
にしか視認することができない。

もし生身の人間が被弾すれば超高速の弾丸によって痛みを感じる間
もなく死んでいるだろう。

知る人がみればPainless gunとでも名付けるのかもし
れない。

駄目押しとばかりにラヴィッジは小型の砲弾を廃屋だったものに打ち込んだ。

ドカーンという景気のいい音とともに廃屋だったものは綺麗に吹き飛び、現場には木片などの小屋があったということを示す僅かな痕跡しか残らなかった。

「ちよつとおおおっ?!?!?!!ななななにやってるのよ!!!!」
「何を慌てているのだ?主よ、ターゲットの虫は敵なのだろう、殺すべきだ。」

「だからってこれは酷すぎるわ、肉片どころか何も残らないじゃない!!!」

啞然としていたルイズがメガトロンに対して喚くが彼は当然と言った風に言葉を返す。

「フーケだったと確認出来るものが残っていればいいわねえ。」

「・・・やりすぎ。」

爆風による髪の毛の乱れを整えながら二人は喋る。

何かを達観したようなキュルケやタバサの呟きは当て所なく森の木々が奏でるざわめきに溶けこんでいった。

無残に破壊された小屋らしき残骸を蒼白な顔をして見ていたロングビルは

「も、もしかしたらフーケは周囲に潜んでいるのかも知れませんが、ちよつと偵察にいつてきます!!!」

と何かに怯えるかのように広場から走り去ってしまった。

「主よ、盗まれたという宝物を確認しなくてもよいのか」

「そ、そうよ。フーケに盗まれた宝物『破壊の玉』を回収しなくっ

「ちゃ」

メガトロンの言葉を聞いてはつとした様に残骸に駆け寄るルイズ。そんな彼女に倣って散らばった廃材を見分していたキュルケはルイズに疑問を問いかける。

「玉？どんな外見をしているのよ、それ。」

「オスマン学院長はみれば分かるって言ってたけど・・・」
不安そうな声をあげながらルイズは宝物を探し続ける。

もし見つからなかったらどうなるのだろうか、己の使い魔による仕業として学院から責任の所在を問われてしまいかもしれない。

そう考えるルイズの探す手には熱がはいる。

しばらく探索を続けていると同じく宝物を探していたタバサから声があがった。

「これ？」

コンコンと杖で自分のすぐそばに鎮座している大きな玉を突っつけているタバサ。

それはラヴィッジの放った砲弾によって生じたクレーターの底にあった。

球面はなだらかな滑面ではなく所々ごつごつと隆起している歪な形状をしていた。鈍い銀灰色を放つそれは全体で見れば確かに球体だが、特殊な形状を有した部品が大量に集積して構築されているような独特の構成をしていることが見て取れる。

縦横ともに2メートルを越えるほどに大きな玉を見上げながらキュルケはルイズに話しかける。

「こ、こんな物が秘宝なの？トリスティン人の品性を疑っちゃうわねえ」

「宝物に品性は関係ないでしょう?!これだからゲルマニアの「おかしい。」

「え?どうということ、タバサ。」

ルイズの言葉を遮ってタバサが声をあげる。友人にとっては珍しい行動にキュルケは反応して問いかけた。

「銃弾による傷跡が見られない。」

「言われてみればそうねえ……とっても固いのかしら?」

ペタペタと件の玉を触りながら言うタバサ。キュルケは友人の指摘に同意するも曖昧な推測しか返せない。

「でも、こんなでつかいのどうやって持って帰ればいいのかよ。」

「大丈夫よ!、こつちにはメガトロンだっているのよ。問題ないわ。」

辟易するように発したキュルケの言葉をルイズは宝物を無事発見できた喜びからか、気楽に否定する。

「それはそうなんだろうけど……って来たわよ、ルイズ!!タバサ!!」

奇妙な地鳴りとともに大地が盛り上がり、不格好な巨人が形成される。

キュルケの視線の先には30メートルを超える巨大な土のゴーレムが音を立てて現れていた。

森の木々を踏み潰しながらずんずんと広場に迫るゴーレムはルイズ達を叩き潰そうとその巨腕を振り翳す。

「見て!!フーケよ、ゴーレムの肩にのってるわ。」

ルイズが大声で指摘する。目を向けるとゴーレムの肩には黒いローブを纏った黒づくめの人物が確認できる。

青髪の少女、タバサが真つ先に反応して杖を振る。

彼女が自分の背丈よりも長い杖を呪文とともにふるうと氷雪混じりの竜巻が発生し、ゴーレムにぶつかつた。

しかし、効果が薄いのかゴーレムはその歩みを止めることは無い。

続けてキュルケが己が得意とする炎系統の魔法であるフレイム・ボールをゴーレムの顔面にお見舞いするも、土の巨人は全く意に介さずに前進を続けていた。

「全然効かないじゃない！！敵わないわ！！」

「一時退却」

得意とする魔法が目の前にいるゴーレムに効かないことを目の当たりにするとキュルケとタバサは一目散に広場から森の中へと駆け出しました。

30メートルを越える巨大なゴーレムが眼前の敵を押し潰そうと迫る中、

瓦礫や木片が散乱している森の中の広場には一台の巨大な戦車と一匹の獣、そして一人の少女が取り残されていた。

意思を持つ戦車は少女に語りかける、

「どつした、主よ。あの小娘共のようにこの場から逃げださないのか、」

日常の中のワンシーンにあるかのように澱みなく話しかけるそれは来る困難に直面した少女の反応を楽しんでいるかのようなのだ。

話しかけられた少女は傍らに在る戦車に答えを返した。

「見縊らないで、メガトロン。私は貴族よ、使い魔を置いて先に逃げる者を貴族とは呼ばないわ、敵に後を見せない者を、真の貴族と呼ぶのよ！」

目の前に迫る強大な脅威に対する恐怖からか、少女の身体や構えられた杖はブルブルと滑稽なほどに震えていた。

しかし、少女の瞳に宿る光に一切の揺らぎは見られない。

巨大な土のゴーレムがその巨腕を高く掲げるのを見てキュルケは叫ぶ。

太陽の光が遮られることによって生じた影がルイズの視界を覆った。

「ルイズ！！ルイズー！！！！」

ルイズを助けるために森の木陰から走り出したキュルケが届かぬと知りながら必死にその手を伸ばすが、到底間に合わない。

だめだ、終わってしまう、そう思い彼女は目を瞑った。

ゴウオオオオン！！！！

大質量を持った物体どうしがぶつかり合う音、そして衝撃波が辺りに轟く。

広場に散乱していた瓦礫が木端のように吹き飛んでいく中、キュルケは恐る恐るその臉を持ち上げる。

森の中にある広場の中央にはゴーレムの巨大な右腕を己の左腕で受け止めている鋼鉄の巨人が凜然と聳え立っていた。

鋼鉄の巨人はその凶悪な相貌を浮かべた顔を愉快そうに歪めながら、傍らにへたり込んでいる少女に話しかける。

「主よ、ここで見ているがいい。これは俺様が片づける。」
「む、無理よ！！あんなに大きいのよ、いくらあなたでも敵わないわ！！！」

ルイズは巨大な己の使い魔よりも更に大きい土塊のゴーレムを見上げながら叫んだ。

ギリギリとゴーレムの巨腕を締上げる鋼鉄の巨人に浮かぶは、狂喜か欣快か。

「主の使い魔であるこの俺様を信じろ、この程度の敵などたいした障害にすらならん。」

「ラヴィツジ、主の傍から離れるな。直ぐに終わる。」

尚も心配そうな表情で見つめる少女を安心させるかのように声をかけるメガトロン。

己よりも巨大な存在を目前に戴いているにもかかわらず

その声には一切の焦燥や切迫の感情が含まれていなかった。

彼はうるたえることなく冷静に、端然と目の前にいる外敵を見据えている。

ルイズを含めてその場に居合わせた人々は土塊のゴーレムが優勢であるという共通認識を抱いていた。

鋼鉄の巨人が如何に強力な力を持っているとはいえ、己の二倍近い体躯を有した敵を相手取ってまともに戦えるわけがない。

断片でも彼の力を目の当たりにしていたキュルケやタバサであつても、それらの思考がある故に、広場から逃げだしてしまつたくらいなのだから。

しかし、彼女達は知らなかった。
全宇宙で恐れられ、忌避された破壊大帝と呼ばれる存在を。

外見だけで判断するならばメガトロンは確かに他のデイセプティコンより見劣りするかもしれないだろう。

彼は広域殲滅武器であるプラズマ砲や六連の多連装砲身などを保持するブラック・アウトのように豊富な武装を有しているわけでも、複数のデイセプティコンが合体することによって出現するデバスターのような巨躯を有しているわけでもない。

しかし、彼は強かった。前述の事柄が取るに足りない些末な事実になり果ててしまうほどに、彼は強いのだ。

暗黒物質であるパワーコアを常食とする逸脱した剛力、不死身にも近い耐久力をもった堅牢無比を誇る鋼体。

高い戦闘能力を持った数々のデイセプティコン達を己が力のみで屈服させ、従属させた彼は絶対的な力を持っている。

部下の反乱すらも大した問題としない彼の力は最早馬鹿馬鹿しいという表現すら生ぬるい。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、

周囲からゼロと罵られた少女の思いはそれほどの存在をここハルケギニアに喚んだのだ。

一国どころか世界を傾ける力を自由に扱えるのだということを経験者が自覚するのはもう少し先の話である。

加えて今の彼にはロウレンシア海溝の底に投棄されていた際に生じた筈の錆や腐食が見られない、他のデイセプティコンを食らい身体をリビルドした際に生じた左腕の欠損も同様に補完されている。

ハルケギニアという異なる惑星にゲートを通って召喚された影響なのか否かは定かではない、しかし、一つだけ確定された未来がそこにはあった。

後に時を於かずして土くれのフーケは徹底して思い知らされることになる、全盛のメガトロンに敵として相対することがどれほど愚かで恐ろしい行為なのかを。

「又ウン！」

という声を発し、気合とともにゴーレムの巨腕を押し返すメガトロン。

彼はそのまま体が揺らいだゴーレムの腹部にソバット、もとい後ろ回し蹴りを

ーズウオオンン！！

お見舞いした。

剛脚による強烈な一撃を食らったゴーレムは仰向けに倒れ、大質量を持った物体が大地に接地する轟音が地響きとともに辺りに轟く。桁違いのスケールで繰り広げられる大立ち回りを目にして三人の少女たちは助力しようという気持ちすら湧き上がらず、啞然とした様子で彼を見守ることしかできなかった。

土塊ゴーレムの肩に取り付いていた土くれのフーケは目論見が外れた不満を唾とともに吐き捨てる。

（なんてえ馬鹿力をもつてやがるんだい、化け物め！！）

（身長が二倍でも体重は二倍じゃ収まりきらないってのにこっちのゴーレムを蹴り上げてくるだど?!）

（長期戦は不味いね、奴らにさっさとあれを使わせるように仕向けないと・・・）

巨大な体躯で以て力圧せるとの腹積もりが崩れ、新たな戦略を練るために深思に耽るフーケだがここでも彼女の憶測は見誤っていた。

そもそも土と鉄では物体を構成する物質の密度に差がありすぎるのだ。

見掛け上の体格の差は大きいが両者の重量は拮抗していた、加えて、体躯のテックスペックで両者を比較した場合どちらが上回るのかは言わずもがな。

伏していた土塊のゴーレムが起き上がるうとしていた様を見て、メガトロンはウィークルモードに変形、離陸する。

「なんだい?!無様に逃げ出すのかい?さっさとかかっておいで・・・よ?・・・えっ?」

フーケはあらぬ方向に向けて飛行する鋼鉄の巨人に対して挑発の言

葉を投げかけるがその口は直ぐに閉ざされることになる。

ヴィークルモードで飛行するメガトロンはゴーレムから一定の距離を取るとブレードを展開、突撃衝角を髣髴とさせるエッジの効いたフォルムへとトランスフォームする。

数瞬の滑空でゴーレムの胸部に衝角の照準を合わせるメガトロン。フーケヤルイズの視線が彼に集中する中、エイリアンタンク後部に搭載されている巨大なスラスタノズルから蒼白い猛火が噴出し、一気に加速。

ゴーレムに向けて己自身という巨大な弾丸を撃ち込んだ。

間近で見ていたルイズですら目で追えぬ程の速度で空を疾駆する彼は土塊のゴーレムを豆腐のように抉り抜き、穿通する。ゴーレムの背面に躍り出たメガトロンは瞬きする間に人型に変形、急激な停止を伴って中空で身を反転させた彼はゴーレムに生じた惨たらしい洞穴に向けて幾つもの光弾を解き放った。

メガトロンの右腕から迸った光体がゴーレムに着弾した瞬間、赫奕とした炎がゴーレムを覆い目も開けられないほどの蒼光が辺り一帯に撒き散らされた。

光に耐え切れずにルイズやキュルケ達が瞼を閉じようとしたその時、
暴れ狂っていた煌めきは一点に集束し、

ーードツグオオオオンンンン！！！！

爆散した。

パラパラとゴーレムの身体の一部を構築していた土くれが周囲に降り注ぐ中、三人の少女は白痴のように啞然とすることしかできなかった。

「は……はははっ……」

ルイズの口からは己の使い魔を労わる言葉ではなく乾いた吐息しか漏れ出てこない。

あれは何なのか、あれが本当に私の使い魔なのか、だとすれば私は何を使い魔として喚んでしまったのか、目の前で繰り広げられた光景に対して只々疑問を投げかけることしか叶わない少女は己の双肩に押し掛かっているものが生半可なものではないことを深く心に刻みつけていた。

嵐が過ぎ去った後の空疎な静寂が広場を支配する。

幾許かの時をおいて右腕の砲門を再び拳へと組替え直したメガトロンは地面に座り込んでいる己の主に向き直る。

「どうした、主よ。震えているのか、それとも恐れているのか。」

「……………」

無言の返答に彼は更なる言葉を投げかける。

「怖いか、主よ。この俺様が怖いか？」

「見縊らないでと言ったはずよ、メガトロン。あの日あの時あの場所ので誓約した通りあなたは私の使い魔よ、それは絶対にならない。」

「メガトロン、私はあなたを恐れない。使い魔を心の底から信じることが出来ないものを貴族とは呼ばないわ。」

拳を握りこみ、睨みつけるように話す鋼鉄の巨人に対して毅然とした態度で接するルイズ。

相も変わらずに身体は震え、未だ自力では立ち上がることにすら出来ていないが、

少女の瞳に宿る強い光は一切の揺らぎなくその先にあるメガトロンを見据えていた。

暴悪な人相の巨人と可憐な少女はそのまま幾許の間見詰め合っていたが異なる人物の介入によってそれも終わった。

のろのろと広場に戻ってきた青髪の少女は従容と諦観の感情をその内に孕ませながらぼつりと呟く。

「フーケ・・・」

「そ、そうよ！！メガトロン、フーケはどうなったのよ?!」

タバサの指摘を聞いてやっと思い出したのか藪から棒に慌てだすルイズ。

フーケも土塊のゴーレムと諸共に粉々になってしまったのだろうか、盗賊の身を按じて憂いを含んだ表情を浮かべる彼女に対してメガトロンは平時と変わらぬ落ち着いた声で話しかける。

「何も問題はない。すぐに片が付くだろう。」

彼の言葉を聞いてルイズはつい先刻まで己を守るようにして佇立していた存在が周囲に見当たらないことに思い至った。

「ハアツハアツハアツハアツゼエハアツ……」
広場からやや離れた森の中、一人の女性が悪路の道程を懸命に駆け走っていた。

長い緑髪を振り乱し、大雑把に腕を振るいながら必死に走る彼女の様子は鬼気迫るようだ。

暴れまわる心臓の拍動と口から発せられる喘鳴が彼女を苛むがその腕をその足を止めようとはしなかった。

（怖い、あれは何だ。コワイ、あれは何なんだ。コワイ、あれは一体何なんだ。）

臓腑を針で突かれるような慄然が断続的に彼女を襲う。

鋼鉄の巨人が右腕の光弾を解放する寸前、フーケはフライの魔法を使って森に離脱していた為からくもゴーレムとの巻き添えを逃れたのだった。

ゴーレムの肩に乗っていた彼女は鋼鉄の巨人が構えた砲門の最奥で蠢く蒼光を見た瞬間、背骨に氷塊を詰め込まれるかのような錯覚をその身に味わった。

——（ダメダ！！アレヲクラツテハイケナイ！！）

次元を別にするほどのおぞましい何かを感じたフーケの全身は戦慄いた。

無数の修羅場を潜り抜けてきた彼女の内にある生存本能は、ゴールムを失ってしまうなどの損得勘定を含めた脳内の思考全てを放棄。考え得る最短の速度と手順で彼女の身体を森へと逃がした。

結果としてその選択は奏功することになる。逃避の過程で杖を失ってしまったが、事実彼女は五体満足の身体で生きているのだから。

(ークルナ、ークルナ、ークルナ・・・)

だが、歴戦の経験を積んだ彼女の優秀な感覚器官は己の背後を恐ろしい速度で追躡する何かの存在をも鋭敏に感じ取っていた。

成長した木々が乱立する森の中の隘路を強引に走り回った影響で彼女の身体はボロボロだ。

全身を擦過傷が覆い、所々に酷い打撲痕が散在する身体はいつ停止してもおかしくはないが、それでも彼女は止まらない。

紅の帯を曳いて薄暗い森の中を這いよるように迫る一匹の巨大な追跡者から逃れるために彼女は止まるわけにはいかなかった。

しかし、いずれ限界はやってくる。

恐怖に耐えかねて振り向いた彼女が最後に見た光景は、鋸の様な乱杭歯が無数に生え揃った口内だった。

第十二話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第十二話

「や、やめろおっ！！ややめ、あが、あがががががが……」
ズルズルズル

瓦礫が散乱する森の中の広場、美しい緑髪を持つ妙齡の女性が地面に磔にされ苦しそうに呻いている。

身に着けている衣服は何かの突起物にでも引つ掛けたのか所々引き裂かれており、最早服としての役割を十分には果たしていない。だが、ボロボロに破かれた衣服とは対照的に彼女の肢体には怪我という怪我の存在は認められなかった。

彼女は手足をじたばたと元気に振り回して自由の身になろうと努力するが、

腰を落として脚立する鋼鉄の巨人が己の右腕から出現させた複数の金属製アームで女性の腕や足を地面に縫い止めているためそれは叶わない。

一匹の巨大な獣の口からイカのような何かが吐き出される。
八本の足を持ち、金属質の光沢を放つそれは表皮に滑りのある黄緑色のジェルを己に纏いつけるとずるりと女性の口内に入り込んだ。
口腔から鼻腔へと侵入したそれは触手を伸ばして甲高い耳障りな機械音を奏でている。

女性は己の身が置かれている現状を理解することが出来ないのか驚愕の表情を張り付けていた。

美しい女性の鼻の穴から触手が生え揃っているという極々一部のマニア垂涎の光景が繰り広げられている様を目の当たりにしてすぐ傍で控えている三人の少女は顔を顰める。

彼女たちの口からはげんなりとした言葉が自然と漏れ出ていた。

「うへえ……」

「うわあ……」

「……」

加えてその女性の頭部には六本足を持つ虫のような何かを取り付いており、己の前膊を器用に使って女性の目や口の中をノリノリで調査していた。

「hey girl, easy or tough way?」

「あがつがツががつ」ピクピク

異物の侵入という不快感から端正な彼女の顔は見る影もなく歪められている。

シヤカシヤカと動き回る彼の存在はどこか滑稽で場の雰囲気とは似合わないが、地面に縫い止められた彼女の惨めさを一層際立たせていた。

臉を限界まで見開いて苦しんでいる女性を尻目に少女たちは嘆息するかのように息を吐く。

「まさか、ミス・ロングビルがフーケだったとはねえ……」

現代のコアプレイムビーでも中々お目にかかれないであろう光景を前にして

夢にでてくるだろうなあ、とやや後悔しながらキュルケは呟いた。

事の発端はルイズの周囲から姿を消したラヴィッジが傷だらけのロングビルを引き摺りながら再び彼女たちの前に姿を現したことから始まった。

負傷したロングビルを連れて森の中から姿を現した己の使い魔を見て動転するルイズ。

責任が！退学だあ！と喚く彼女をまあまあ落ち着きなさいと宥める

キュルケ。

青髪の少女、タバサは傍らに聳え立つ鋼鉄の巨人に事の仔細を冷静に問いかける。

「どうして彼女を捕まえたの？」

「あれがターゲットの虫けらだからだ。それ以外に理由はない。」
タバサの問いかけに当たり前だと言った風に答えを返すメガトロン。
降ってわいたような返答の内容に少女たちは一転して慌て始めた。

「・・・それはロングビルが土くれのフーケであるという認識で良いのかしら、ミスタ・メガトロン」

やや訝りながらも裏付けの質問を補充するキュルケ。ついさっきまで行動を共にしていた教員が世を賑わせている件の盗賊であるという彼の主張は俄かには信じがたいのであるう、無理もない。

本来味方である筈の存在が実は敵であったという事実は誰も好んで信じようとは思わないからだ。

キュルケの問いかけに肯定の意を示したメガトロンは人を寄せ付けない険しい表情をその顔面に浮かび上がらせる。

「そのとおりだ。敵が最初からこちら側にいるとはな、ぬかったわだが・・・」

ズシン・・ズシン・・と足音を響かせながら傷ついたロングビルへの距離を縮めるメガトロン。

だらだらと冷や汗を流しながらメガトロンの様子を見守っていたルイズは、

長大な右腕のブレードをジャキンツと展開する彼を見て己の懸念が的中したことを確信した。

「……これで終わりだ。ただではすません。ゆっくりと、苦痛を伴って殺してやる。」

事実上の死刑宣告にも等しい言葉を臆面もなく発するメガトロン。彼の発言に含まれる揺るぎない鉄の意志を感じ取ったルイズは言い表せないほどの怖気をその身に抱いた。

(やる……こいつは本当にやっつけてしまう……)
ルイズが止めなければこの鋼鉄の巨人は幾許の間もなくそこで横たわっているロングビルを殺害してしまうだろう。

そこには何の気品も尊厳もありはしない。惨めに惨たらしく、凡そ人間が味わうことが出来るであろうあらゆる苦痛を伴って、人間と言いつつよりは畜生という呼称が適切となる叫びをあげて彼女は死んでいくのだろう。

彼女の発するどんな叫喚も啼泣をも一顧だにせず、見向きもせず、歯牙にもかけず、彼女の人体が生物学的な死を迎えるまで唯々機械的に苦痛をもたらし続けるのだろう。

何故ならば彼は機械だから。

壊すことに特化した彼の存在は彼と敵対する全てのものを尽く破壊するまで止まらないし止まれない。

メガトロンにとって小さな有機生命体の意思や痛みなどは路傍の石よりも些些たるものであり共感することも理解することもできないのだから。

破壊大帝による無慈悲な破壊を止めることが出来るものなど一人を

てはいなかった。

「だめだめだめだめっ！ゼツツタイに駄目なんだからあ！！」

「考え直してほしい」

「そうよ、他にも採れる選択肢はあるはずだわ。」

三者三様の言葉で諫められるメガトロン。彼がその気になれば朝露を払うよりも簡単に少女たちを打ち払うことが出来るのだろう。

土塊のゴーレムにすら太刀打ちできなかった少女たちの魔法では土塊ゴーレムを粉微塵に粉碎したメガトロンに対抗し得るはずもないからだ。

だが彼は足元で両腕を振り回し喚き散らしている桃色髪の少女に忠誠を誓っているためそのような暴挙に及ぶことは決して無い。

ギャンギャンと叫びたてる己の主に対して当惑したように彼は話しかける。

「何故止めるのだ、我が主よ。禍根は根元から断たねばしこりを残すぞ。」

「殺してしまえばよいではないか。何故だ。何故理解せぬのだ。」
と言って、敵意と害意を籠めた面貌でルイズ達を威圧するメガトロン。

タバサは己の両腕が無意識の中で杖に添えられていたことに気付き意識的に両の掌を杖から離そうと努力する。

しかし、微小な震えに支配された己が両腕は一向に動こうとはしなかった。

寧ろ必死に堪えこれ以上の震えを露わにしないことで精一杯だ。

「ああそうか、そうなのだ。」

タバサは悟る。まだ理解していなかったのか今更過ぎる、と軽い自嘲が口から零れる。

私はただ目を背けていただけだ、この存在から逃避していただけなのだ。このピンクブロードの少女を除けばあの朱く染まった眼界には私たちが本当に只の昆虫に見えているのだろう。

横たわり細い息を吐くロングビルも、青ざめた顔をした大切な友人も、そして私も皆平等に……、

ある存在がタバサの目に留まる。それは体の大きさに不釣り合いな大きな足で力強く大地を蹴り、地を移動していた。

ああ、まるで私のようにではないか、あれから見た私とこれはきつと同じなのだ、身体と不釣り合いに大きい足なんかまるでそっくりだ。

足元で飛び跳ねる小さな昆虫を見て己を省みたタバサは思う。

敵対したいと思えない、

立ち向かおうという気概が湧いてこない、

ましてや勝てるだなどとは烏滸がましい。

北花壇騎士団の七号として命に係わる危険な任務を幾つもこなしてきたメイジであるタバサをもってさえこう思わせる彼の存在はこのハルケギニアにとって少々過ぎたものなかもしれない。

「生かしておけばその虫は再び主の前に立ちふさがるやもしれん。」

「もう二度と主への狼藉を許すわけにはゆかん、今、ここで……」

……殺す……」

両掌で掴みとれるような灼然たる殺意をもって彼は言う。

修羅のような恐ろしい面貌が峻厳に軋むさまを眼前にしてルイズ達は萎縮し、気後れするが

それでも彼女たちは、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは退くわけにはいかなかった。

彼女が貴族である以上、貴族としての誇りや自負を彼女が抱く限り、それは到底受け入れられないことであるからだ。

「駄目よ、メガトロン。殺してはダメ。相手がどんな存在であつても、無抵抗のものを傷つけるのは許されない行為だわ。」

「・・・主よ!・・・」

「これは・・・これだけは譲れない。お願い・・・」

針で突けば破れるような緊張がその場を支配する。

可憐な少女たちと鋼鉄の巨人は互いに譲らずに向かい合っていたが、先に折れたのは後者の方であつた。

何かを受け入れたかのように息を吐いた彼は右腕に展開していたブレードを仕舞い込む。

その様子を見た少女たちは力が抜けたようにその場にへにやつと座り込んだ。

「了解した、我が主よ。俺様はその虫を殺さない。」

己の主である少女の真摯な願いを聞き入れた彼はドサツと腰をおろす。緊張から解き放たれた反動からか少女たちは疲れ切つたように深く息を吐き出した。

それも致し方ないことだろう。使い魔の身分であるとはいえ、あの破壊大帝と真つ向から対面して無事でいられるはずがないからだ。彼にあの顔でメンチをきられて平然と構えることが出来るものなどハルケギニア広しといえどもそう多くは存在しない。

それを踏まえると少女であるにもかかわらず常日頃からメガトロンと対等?に渡り合っているルイズは大人顔負けの胆力を持っていることになる。

幼さゆえの蛮勇なのか、それとも心根を起因とする高潔さを故とし

ているのかは分らないが、

ここハルケギニアに限定して考えれば、彼を抑止できるものがある
とすれば恐らくルイズを除いてほかにないだろう。

その事実は後にルイズを苦しめることになるのだが、今の彼女には
知る由もなかった。

額の汗を拭いながらキュルケは咳く。その声には深い疲労の色が滲
みだしている。

「ルイズ、・・・あなたの使い魔ちよつと怖すぎよ・・・」

「ふふ、まあメガトロンはこれでも優しいところがあるから。怖が
らないであげてちょうだい。タバサも許してあげて、こいつはこ
ういうやつなのよ。」

「分かった。」

こくりと頷くタバサを尻目にメガトロンは己の部下にロングビルの
治療を命じる。

何はともあれ彼女が目を覚まさねば事は進展しないからだろう。

ドクターの治療が終わって身体の怪我が全て癒えた後、ルイズ達が
ロングビル（四肢拘束済み）に動機などを尋ねるも彼女がだんまり
を決め込んだところから物語は冒頭の部分へと移行する。

「ミス・ロングビルも素直に事情を話してくればこんなことには
ならなかったのにねえ。」

気だるげにキュルケは咳くも今となっては元の木阿弥だろう。キュ
ルケ自身もまさかこんなことになるとは思いつかなかったのだから。
ルイズの使い魔である彼が 安全に 事情を聞きだすと言った時点
でこの展開は致し方ないことなのかもしれないが・・・。

鼻からのびている複数の触手がもぞもぞと動き回る光景は例え肯定的に捉えてもあまり見れたものではない。己の見てくれに一際気を遣う貴族であるならばなおさらだ。

ビジュアル的に苦しい現状は若い女性であるロングビルにとって褒められたものではないのだろう。

「・・・そ、そうよね。ねえメガトロン。これはいつ終わるのよ！」

「安心しろ、我が主よ。直ぐに終わる。命に別状はない。」
ルイズの問いかけに嗜虐的な笑みを浮かべながら答えるメガトロン。やがてケポツという排出音とともにロングビルの口内からイカの様な何かが吐き出される。すると彼女の胸元で chop! chop
!! していたドクターは排出されたそれを捕まえ、己の胸部に押し当てた。

「な・・・なによこれ・・・」

「興味深い」

「わお! すつつごいわねえ、これ!!」

空中においてゴーレムによって破壊された宝物庫に侵入しようとしているロングビルの姿が克明に写しだされていた。

イカの様な何かを胸部に押し付けているドクターの眼部から現実なのかと見紛うほどの高精細な3Dホログラフが投影され続けている様を見て少女たちはもはや幾度ともしれない驚愕を味わっている。次々と移り変わる映像のストリームは水面に写る魚群のように揺らめきながら少女達の視線を一身に集めていた。

「メガトロン、これは一体何なの?!」

ルイズは唾然としながら己の使い魔に問いかけた。

科学の発展していないハルケギニアにおいて『映像』という存在は

物珍しいを通り越して未知のものであるのだろう。

今までに一切見たことが無い現象を目の当たりにして彼女たちが驚かないはずがない。

ルイズはラヴィツジとの模擬実践訓練において一度それを目にしていたが、切れ間なしに移り変わる光景には体験済みの彼女と言えど驚きを隠せないようだった。

問いかけられたメガトロンは仰々しく事の詳細を説明し始める。

「これは横たわっている虫けらの記憶を抽出して映し出したものだ」

「そう記憶を……つてそんなことが出来るの!？」

ルイズの抱く疑問も無理からぬことだろう、言い換えれば人の頭の中を覗き見しているに他ならないのだから。

現代世界においても明らかにオーバーテクノロジーな光景は驚嘆に値するのだろう。

「可能だ。間接的にだが脳内シナプス間の電気信号を読み取ること
でこやつの実体験を追憶することができる。」

「これを見ればこの虫けらの秘匿している目的が把握できる筈だ。」
ルイズ達にとって理解の範疇を越えた彼の説明の最中もロングビルの記憶達は変わらずに次から次へと移り変わっていった。

鼻の下を伸ばしただらしない表情をしたオールド・オスマン。にこやかに笑いかけているコルベール。授業に臨んでいる学生たち。大声で商いをしているのであろう露店の商人たち。疲れ果てた表情の物乞い。肥え太った高慢な貴族たち。物言わぬ動かない人間であったもの。煌めく財宝の山。

時には歌劇的に、時には喜劇的に、時には悲劇的に変遷する群像劇

に少女たちは自然と引き込まれている。
ロングビルの経験した数々の記憶達、ロングビルそのものである一
欠けらは途切れることなく流転して

「・・・これ・・・モード大公よ。」

彼女の過去を紐解く端緒を誘った。

「も、モードたいこう？誰なのよそれ」

「はあくこれだから田舎者のヴァリエールは仕方がないわねえ」

「う、うるさいうるさいうるさい！！早く誰なのか話さないよ。」

辟易とするような声音のキュルケに対して普段通りの癩癩を起すル
イズ。そんな彼女に急かされてキュルケは己が知っている限りのこ
とを話し始めた。

「確か、アルビオン現国王ジェームズ一世の王弟だった貴族の筈よ。
10年位前に会食でお会いしたことがあるから間違いないわ。」

「だった？」

タバサが疑問を投げかける。

「処刑されたのよ、表向きの理由は謀反を企んだからとかという理
由だったけどね。見た感じとても謀反を企むような人物には見えな
かったから他に理由があったんじゃないかと私は思ってるわ。」

「どーしてそんな大昔のことをはっきりと覚えていられるのよ」
ルイズは疑惑の念を込めながらジト目で話しかけた。

「ふふふっ、会食の時にモード大公と連れ立って歩いていた殿方が
いっい男でねえ。モード大公はそのついでよ。」

「

「あ！ほら、これよ、この方よ！」

男絡みかよっ！と二の句が継げない絶句したルイズをほったらかしてキュルケは弾んだ声をあげると中空に映し出されている映像を指さした。

そこには満面の笑顔を浮かべがちりと握手している二人の男性が投影されている。

金髪で柔和な顔をした壮年の男性と緑色の髪を短く刈り上げた彫の深い男性がそこにいた。

「この緑髪の殿方よ！いいわよね、ムキムキでいかにもダンディ
よって感じ。幼いなりに大人の魅力を感じたわあ。」

「惜しむらくはあの場では名前をお伺いできなかったのよねえ、もし機会があればお名前を「ヘンリー・オブ・サウスゴータ」

パツと声が聞こえた方ヘルイズ達が顔を向けるとロングビルが不貞腐れた表情をして横たわっていた。

彼女は別の意味での初体験を済ませた生娘のように力なく言葉を紡ぐ。

「それがその男、あたしの父親の名前だよ。」

「何でも話すからさ、それを止めておくれよ。もうこれ以上あたしの記憶を覗かないでおくれ。」

「わ分かったわ。ドクター！それをとめなさい。」

ルイズの慌てた呼びかけに応じて記憶の照射をドクターは停止する。

「まったく人の記憶を勝手に盗み見るなんてね、貴族のお嬢様方はプライバシーってもんをしないのかい？」

「それはあなたが中々事情を話さないからでしょう！？というより私たちもまさかこんなことになるだなんて思わなかったのよ！仕方

ないじゃない！」

忌々しげに呟くロングビルはぼつぼつと話し始めた。

これまで置かれていた自身の境遇。魔法学院に保管されている宝物を盗むために教員として潜入していたこと、盗賊として生活してきた己の半生、そして――

「「ハーフエルフ?!」」

ハルケゲニアでは恐怖の対象として忌み嫌われるエルフの存在が出てきたことに驚きを隠せないルイズ達。

ロングビルは案の定といった風に従容と続けた。

「ああそうさそうさ。ティファニアは半分だがエルフの血をひいているよ。このハルケゲニアで恐れられているエルフの血をね。」

「なるほどねえ、これでモード大公がロングビルの記憶の中にあつたことにも納得がいったわあ。」

まさか妾だったエルフの子どもを匿っていたことが投獄処刑の原因だったとわねえ」

ロングビルの説明を聞いたキュルケは合点がいったという風に首肯する。森の広場に向かうまでの会話内容から鑑みても彼女の説明は得心が行くものであるからだ。

議題に登った疑問が氷解していくにつれて明らかとなっていく事件の全容は貴族であるルイズにとって考えさせられるものだった。

現在進行形で残積している人とエルフに纏わる問題はとても根深く奥が深いものになっている。

ハルケゲニア全土に普く存在する精霊の力を用いた先住魔法を自由自在に操る彼らは一人で人間の兵士数十人分に値する力を持ってい

るという。

これでは凡百の兵士たちがいくら東になろうとも人間の手で彼らの住まう東の地を侵せるはずがない、事実ハルケギニアの諸王国は6000年という途方もない年月の中で唯の一度でも彼らを打倒できた試しはないのだから。

故にハルケギニアの人々にとって『エルフ』とは恐怖の象徴に他ならない。

自身の境遇が原因で不遇の扱いを甘んじさせられているティファニアの様な存在は元々の個体数こそ少ないもの、ここハルケギニアでは決して珍しいことではないのだ。

同じ人間であるにも拘らず平民と貴族という区分けが存在するほどだ、エルフの血が混じっているという事実は人々を迫害に駆り立てるには十分過ぎ得るものなのだろう。

ハーフエルフの少女が此れまでに過ごしてきたのであろう苦難に満ちた生活を偲ぶルイズの心には自然と沈んだ気持ちが出来た。

ティファニアとルイズが実際に出会ったことは無いが、周囲からの迫害という点ではルイズにも一日の長がある。

トリスティン有数の名門公爵家の三女として生まれたルイズは日常生活における苦勞という苦勞を殆ど味わうことなく暮らしてきたが、前提条件として求められる魔法が使えないルイズには異なる地獄が待っていた。

尊大で傲慢、横柄で高飛車な貴族の人々にとって真面な魔法ひとつ使えないルイズの存在は格好の的だった。

授業で、食事で、生活で、日常における様々な場所で迫害を受け続けた経験を持つルイズにとってただハーフエルフであったが故に苦境にあったティファニアのことを他人事として無遠慮に断じられる

わけがない。

事の進展に伴ってルイズの中にあつたロングビルに対する猜疑心は綺麗サツパリ溶け切つていた。

貴族としての位を失い、盗賊に身を襲しても苦境にある少女のことを支え続けたロングビルに対して十分すぎるほどの好意をその身に抱くルイズ。

「ミス・ロングビル、・・・いえ、ミス・マチルダ、今までの非礼を詫びるわ、御免なさい。許されるとは思わないけれど、私にできることがあれば何でも協力させていただきます。」
と言つて。

ルイズは頭を下げた、マチルダに対して明確な謝意を表すために。その様子をポカンとした表情で眺めるキュルケ。

プライドの高いルイズが事情があるとはいえ盗賊であるマチルダに頭を下げるとは思わなかつたのだろう。

「はっ、急にしおらしくなつちゃつてまあどうしたんだい、ヴァリエールの御嬢さん。何はどうあれあたしは盗みを働いたんだ、あんたらがしたことは間違つちやいないよ。」

あとはあたしが然るべき罰を受けるだけさね。さつさと身柄を軍でもどこにでも引き渡せばいいさ。」

淡々と言葉を紡ぐマチルダはまるで憑き物が落ちたかのような自分自身が抱えていた重みを他者と共有できたことによつて生じた安堵感が彼女の精神に僅かばかりの安息をもたらしたのかもしれない。罪には罰が必要だと話すマチルダを見て居たたまれない気分になるルイズ。

俯き視線を大地へと向ける彼女は沈痛な面持ちを浮かべていた。

やや暗澹とした空気がその場を支配するがそんなものを欠片も気に

せずに彼は言葉を紡ぎだす。

「だめだ。貴様は俺様の部下になってもらおう。」

「はあつ?!」

驚きを通り越した呆れの声がある場に木霊する。

「なななな何を言ってるのよおつ?! マチルダを部下にするですつて!!!」

この使い魔は公開顔面触手プレイを施すだけでは飽き足らずマチルダをこき使おうというのだろうか、

再びギヤーギヤーと喚きたてるルイズとは対照的に、当の本人であるマチルダはシクシクと静かに落涙していた。

もはや抗おうという気持ちすら湧き上がらないのだろうか、瞳にはやや濁った光がさしている。

「ああそうだ、殺せないのであればこちら側に引き入れるしかあるまい。これは虫けらの中では使えるようだからな、使えるものは使う。」

と言うとラヴィツジに命令するメガトロン。

彼の命令に頷くとラヴィツジはバカリとその口を開いた。

ザラザラザラザラツと何かか吐き出される。

小さな小山を築いたそれを見てルイズやマチルダは目を見張った。

それはダイヤモンドの山だった。

大小様々だが一つ一つが太陽の光を受けて屈折率の高いダイヤモンド特有の虹色に光り輝いている。

テーブルサイズ、クラウン角度、パビリオンの深さ、ガードルの深さなどのプロポーシオンが絶妙な均整を誇る見事なカットイングが全てのダイヤに施されていた。

この一山で国すら買えてしまうのではないかと言っほどの玲瓏たる宝物を眼前にしてルイズ達は暫しの間言葉を発することが出来なかった。

「持てるだけ持っていくがいい。当面の活動資金に充ててくれ。」
マチルダの拘束を解きながら彼は言う。

ルイズがこのダイヤモンドたちの所在をメガトロンに問いただす。彼の説明によればこれらの宝物たちはガリアの火山山脈から採掘したものであるという。

宝石の含有量が豊富な鉱脈を調査の際に偶々発見した時、念のために掘り出しておいたのだとか。

誰に断るでもなく、大胆に。数回に亘って何度も何度も。精錬と加工も既に済ませているところを見るとふてぶてしいとさえ言えるだろう。

他にも沢山あるから入用であれば幾らでも言ってくれ、と事もなげに言う彼を見てルイズは頭を抱えてしまう。

主人よりも遙かにお金持ちな使い魔とはこれ如何に。

主としての適格についてルイズが思い悩んでいると拘束を解かれたマチルダは立ち上がる。

マチルダは身体についた土を払い落としながら思索する。

胡坐を掻いて皆を見下ろしている鋼鉄の巨人が考える真意を汲み取るうとして……、- 彼女はその思考を打ち切った。

何をしようが目の前にいるこれからは逃れられる訳がないのだ、ならば選べる選択肢は多くない。

寧ろいま生きているだけでも貴い物と言っべきか。

ウエストウッドの孤児たちを、ティファニアを、そして自分自身を守るためには。必要条件を勘案するとマチルダに残された選択肢は一つだけだった。

「分ったよ、あんたに使われてやる。土くれのフーケはメガトロン、あんたの幕下に加わった。」

なればこそ毅然とマチルダは言う。

盗賊を生業にしているとはいえその風格はアルビオンの名門貴族、故サウスゴータに違わないものだった。

突然の展開にルイズは頭が追い付いていかなかった。しかし、不思議と悪い気分は湧いてこない。却って晴れ晴れとするくらいだ。

名の知れた盗賊を見逃す私達、その盗賊よりもずっとずっと怖い己の使い魔。荒唐無稽なこの関係に自然と笑みが浮いてくる。

何が正しい結果だったのか、ルイズには分らない。

だが活き活きと宝石を眺めまわしているマチルダやキュルケ達の笑顔は後悔の感情からはほど遠いものだったのでルイズはそれでよしとした。

第十二話（後書き）

感想やご指摘が頂けたら幸いです。

第十三話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第十三話

「……で？一体これは何なんだい、ヴァリエールの御嬢さん方。教えてくれないかね。」

大量のダイヤを抱えているマチルダがそこにいた。破れた衣服の一部を風呂敷代わりにして活用している。心なしか彼女の肌が艶々しているのは気のせいだろうか……。

彼女の眼前には件の玉が何事も無いかのように平然と鎮座している。

己の背丈よりも遥かに高い玉を見上げながら嘸くマチルダ。そんな彼女を見て少々憤りながらルイズは反論する。

「何なのかを知らずに盗んだってこと?!」

「ああ、そうさ。あのオスマンが特に口酸っぱくして嚴重に管理していた一品だ。」

値打ちものだろうと踏んでこれを盗んだんだが何せ使い方が分からなくてねえ。

あんたらに使わせようと思って態々ゴーレムを睨けたんだがそれも徒労に終わったし。」

マチルダの言い分は本職の盗賊が聞けば眩暈がするようなものだった。

盗んだはいいが使い方が分からない。そんな得体の知れないものの為に骨を折ったというのだろうか。

宝物を盗むため、学院に教員として潜入するという周到さからは不釣り合いな手落ちからマチルダのややうっかりとした性格が伺える。

「私たちにも分らないわ、オールド・オスマンは『破壊の玉』に関することは何も教えてくれなかったから。」

マチルダの問いかけに頭を振るルイズ達。

渋い表情をしたマチルダに答えを返したのはルイズ達ではなくメガトローンの部下であるドクターだった。ラヴィッツの胸部格納庫から姿を現すドクター。

彼は綿埃を思わせる軽やかな跳躍で『破壊の玉』に取り付いた。

そして極細の節足達を忙しなく動かしながらその器壁をしばらくの間這いずりまわっていたドクターは確信とともにその口を開いた。

「メガトロン様、これは共生者です。」

「きょうせいしゃ？、あなたはこれを知っているの、ドクター。」
細長い前足がその半ばから折れ曲がり！腕を組んだドクターはルイズの質問に答え始めた。

この球状の物体はメガトロンと同様の金属生命体であること。但し、同じであるとはいえその根本や成り立ちは若干異なっており厳密に定義するならば似て非なる者らしい。

ラヴィッツやドクターは己の体内で必要なエネルギーを自己生成することによって活動している。

しかし、目の前にあるこれはエネルギーを体内で生成する器官を生まれながらに保持しておらず、他者からの供与といった形でエネルギーを得ているのだそうだ。

それ故に『共生者』。

個ではなく、宿主となった金属生命体とともにその一生を過ごす者。

ドクターの口から展開された説明はルイズの理解の範疇を遙かに超えるものだった。

メガトロンに続きまたもや繰り広げられる煩雑な口述を聞いたルイズは頭から湯気を立ち上らせる。

まるでたった今湯船から出てきたかのようだった。

トリステイン魔法学院でも有数の頭脳を持つタバサであっても彼

らの説明を一分も把握できない。
何しろ理解する取っ掛かりすら無いのだ、それも無理からぬことだろう。

基礎となる科学という領域の造詣が深くない彼女たちが彼らの説明を聞いても何かの音、もしくは記号としか聞こえず、理解することが出来ないからだ。

ドクターの説明を聞いたメガトロンは徐に立ち上がると件の玉に近づいた。

「ちよつと！何をするつもりなのよメガトロン。」
立ち上る湯気もそのままにルイズは問いただす。

ルイズにとつては未だに正体が知れない何かに己の使い魔が近づくのを容認することは出来ないのかもしれない。

もしくは学院の宝物である『破壊の玉』の安全を思つてのことなのかかもしれないが……、普通に考えれば寧ろそのきらいの方が大きいだろう。

ラヴィツジの掃射にも傷一つ付かなかった『破壊の玉』であるとはいえメガトロンの手にかかればどうなるかは火を見るよりも明らかだった。

トリステイン魔法学院の一生徒であるルイズにとって宝物を破壊されるのだけは避けたいところだろう。

「主よ、俺様は先ほども言つたはずだ。使えるものは使う……とな。」

と、メガトロンは言う。すると彼の右腕から黒色の紫電が迸る。見惚れるような煌めきとは懸け離れた異様な輝きがメガトロンの右前膊から溢れていた。

それを見て思わず後ずさるルイズやマチルダ。

マチルダは身体の身震いを止めることが出来なかった。

つい先ほどの大立ち回りで目撃した蠢く蒼光を思い出したからだ。

メガトロンは己の右掌に漲る黒色の輝きを躊躇うことなく『破壊の玉』に押し付けた。

黒色の紫電は『破壊の玉』を覆い始める。

メガトロンの右腕を始点として既存の銀灰色が艶のある黒灰色にゆっくりと移り変わっていった。

黒が全ての銀を侵食し終わるとその変貌が始まった。

ここにきてルイズはやつと理解する。

何故これが『破壊の玉』と呼ばれていたのか、

何故オスマンが此れを他の宝物よりも厳重に管理していたのかを―

「そうか逃げられてしまったか……。まさかミス・ロングビルが『土くれ』のフーケだったとはもう、謀られるとはわしも耄碌したものじゃわい。」

あその後、学院に戻ったルイズ達はオスマンに事の顛末を報告していた。

トリステインを騒がせている盗賊は私の使い魔の部下になりました、などと言つことをそのままオールド・オスマンに話すわけには行かないため逃走を許してしまった、という自分たちの手落ちとして報告することにしたルイズ。

キュルケやタバサも貴族としてはあるまじき行為であるとはいえ、

マチルダやメガトロンの手前概ね納得した様子でルイズの提案に賛成していた。

特にダイヤの一部を貰っていたキュルケに至ってはそんなことどうでもいいといった風であった。

「かの有名なフーケには逃げられてしまったようじゃが、君たちは『破壊の玉』を無事取り返してくれた。これはとても大きな功績じゃ。学院長としてはこれほどの功を無下にするわけには行かん。」

ラヴィツジ以外の三人は肅々と一礼を返した。

「シュヴァリエの爵位を君たちに配するよう宮廷に申請しておこう。追って沙汰があるじやろうからそのように。ミス・タバサはすでにシュヴァリエの爵位を持っているから、精霊勲章の授与を申請しておくでしょうかの。」

「本当ですか!?!」

キュルケがやや興奮気味に聞き返す

「もちろんじゃよ。何せ君たちはあの『破壊の玉』を取り返してくれたのだから。然るべき報酬を受け取るのは当然じゃや。」

「おお、そうじゃそうじゃ、今日はフリッグの舞踏会じゃ。『破壊の玉』も無事に帰ってきた所で、今夜予定どおり執り行うとしよう。」

オスマンはポンツと手を軽く叩きながら言った。

「ほっほ、今日の主役は、お主達じゃ、せいぜい着飾るように。主役がしっかりせんと舞台も締まらぬからの。」
そう言っつてルイズ達を自室へ帰るように促すオスマン。

しかし、ルイズ達はその場から動かなかった。じつとオスマンの目を見つめるルイズ。

まるで何かを見通すような、見透かすような視線を受けたオスマンは怪訝な表情を浮かべていた。

「どうしたのじゃ、ミス・ヴァリエール。部屋へ戻らぬのかね。」
その場から動こうとしないルイズ達に対して問いかけるオスマン。
ルイズは目の前にいる偉大な魔法使いに臆することなく言い切った。

「オールド・オスマン。お願いです、話してください。あの『破壊の玉』のことを、何故あれが学院の宝物庫にあったのですか。」
ルイズの言葉を聞いたオスマンは目を見張った。

「やはり何かある。オスマンの反応を見たルイズは確信した。

普段の態度からは考えられないような表情にルイズは確信の色を深くする。

「……………やはりのう、恐ろしい程強力な使い魔が召喚されたと聞いた時から、予想はしていたんじゃないが、まさか本当に当たるとはの。」
「どういうことですか、オールド・オスマン。」
さながらこの展開を知っていたとでも言うかのようにオスマンは語る。

オスマンの意外な反応にルイズは少々興奮しながら聞き返す。
オスマンがさつと杖を振るう。金色の粒子が学院長室の中で浮遊した。

ディテクトマジック。他者の目や耳が無いかを確認するために使用される比較的安易な魔法だった。

「ミス・ヴァリエール。ミス・ツェルプストー。ミス・タバサ。あれを取り返してくれた君たちにはあれの真相を知る権利がある。」

ただし、知れば二度と引き返すことは出来ん。それでも良いかね。

ルイズ達は無言で頷いた。自身の居室である学院長室でもわざわざ
ディテイクトマジックを掛けるほどの念の入れようだ。

これから彼が話すことはよっぽど他者に聞かれてはならない重要な
ことなのだろう。

ルイズはゴクリと口内の唾液を飲み込んだ。

目の前に座る偉大なる魔法使いから発せられる只ならぬ雰囲気
がルイズ達の緊張を誘ったからだ。

そしてオスマンは語り始める。

『破壊の玉』と呼ばれる物の真相を、過去に何が
あり何を彼は知ったのか。

それはハルケギニアでも随一の魔法使いであるオスマンが闘いを
放棄した決定的なきっかけだった。

かくて青年は杖を捨てる。

「あれはそういまから百年、否二百年ほど前のことじゃったかの。
そなたたちが生まれるよりもずっと前のことじゃ。

すまぬの、少々頭が呆けてきたようじゃ、いかんいかん。しかし、
時期は問題ではないのじゃ、時期は問題ではない。

あの時のことは忘れようがないからの、それだけは幸いじゃわい。

ゲルマニアでのことじゃ、当時僕はスクウエアに成りたてのメイジでの。史上最年少でのスクウエアとして煽てられたもんじゃわい。まあ、若気の至りじゃな。僕は自分自身がだれよりも強いと言って憚らなかつたのじゃからな。今思い出すと恥ずかしくて仕様がないわい。

そんな僕にとある依頼が舞い込んできたのじゃ。ゲルマニアからの特使が来たと言つての。

内容は怪物退治じゃつた。トリステインとゲルマニアで腕利きのメイジを出し合つてゲルマニアの東端で暴れまわっているその化物を合同で倒さないかと言う旨のものじゃつた。

当時のゲルマニアは建国してからまだ4〜50年しかたつてなくての、そんな新興の国家に力を貸すべきか否かと言うみみっちい議論もあつたのじゃが隣国に貸を造る絶好の機会ということで申し出は受理されたのじゃ。

僕を始め複数のスクウエアクラスのメイジがその化物退治に参加することになつての、驕る僕は一人で十分だなんだと言つたりもしたんじゃが、僕の旧友が必死で説得してくれたの、結局当初のメンバーでその化物退治に参加することに相成つたのじゃ。

その化物は幾つもの村を壊滅させている、早急に打ち取らねば甚大な被害は避けられない、と風竜に乗つての移動の際に聞かされたのじゃが、僕は未だに樂觀視しておつたのじゃよ、おろかなことなのう。

これだけの手練れが集まればトルル鬼どころかあのエルフでさえも相手取れるとたかを括つておつたのじゃからの。

異変に気付いたのはゲルマニア側のメイジ達と合流する予定じゃつたポイントに到達してからじゃつた。合流地点である広場に行つてみても誰の迎えもなかつたのじゃ。

初めは礼儀知らずのゲルマニア人のことだから仕方ないことだなん

だと笑っておったのじゃが、直におかしいとメンバーの一人が気づいた。

キャンプ用の資材と焚火の火が立ち上っているのに誰もいないのはおかしい、と。

皆で手分けして探したのじゃがこれまた直ぐに見つかった。

何が？、決まっておろう。ゲルマニア側のメイジ達じゃよ。皆生きてはいなかったがのう。

散開した儂達が見つけたのは肉の山じゃった。人であると判断できるものは一つもなかったからの。皆尽くばらばらにされておつての、千切れ跳んだのであろう腕についていた腕章からゲルマニアのメイジだと判断したんじゃ。

今思えばこれが間違いじゃった、．．いや今更何を思っても無駄じゃから自省は置いておくのじゃが、もしやり直せるのであれば離れるなんてことは絶対にせんわい。

何せ儂の唯一無二だった友人が串刺しにされたんじゃからの。それは巨大な蠍じゃった。今までに見たことが無い程巨大での、一瞬呆気にとられた、とられてしまったのじゃ。

鈍色に光り輝くそれはまず儂らが乗ってきた風竜を狙ったんじゃ。

啞然としたの、儂らに一目散に駆けてくると思ったら儂らに見向きもせずには竜たちを襲撃したのじゃから。

蠍の巨大な爪甲で竜たちはあっという間にバラバラにされてしまった。

その瞬間儂たちは逃げ足を失ったのじゃ、この場から逃走するための足を。

信じられない程狡猾な相手じゃった、恐らく解っておったのじゃろう。儂たちなどいつでも殺せる、と。

僕たちを逃がさぬように周到に周到に襲いかかってくるそれを見たとき僕は悟ったよ。狩られるのは、刈られるのはこちら側だと。

皆必死に戦った。持てる力の限りを振るって戦ったのじゃ。しかし、無駄だった、全て無駄だったのじゃよ。

大海を闊達に泳ぎ回る大魚のように土中を移動するそれに全く歯が立たなかったのじゃ。

一人また一人と殺されていったよ。

巨大な爪に引き裂かれた者もいた、

絶叫とともに土中に引きずり込まれる者もいた、

大矛のような三叉の靱尾に刺し貫かれた者もいた。

僕の友人がそうじゃったよ、僕を・僕なんかを庇ったばかりに・
・百舌鳥の贄のように掲げられてしまったのじゃ。」

かくて青年は我を忘れ

「一人残された僕は死力を振り絞って戦った。

有らん限りを杖に込め、メイジの誇りを胸に戦い続けたのじゃ。友の仇を、バラバラにされたメイジ達の仇をこの手で叶えるためにの。

だが、そもそもの話、僕一人でどうこう出来る話ではなかった。

歴戦の経験を積んだ幾多のメイジ達を檻褸雑巾のように葬り去った

あれに敵う訳がなかったのじゃ。

鉄を錬金して造ったゴーレムを粉々に粉碎された僕は、恐怖した、慄いた、怖れた。

どうしようもなかったのじゃ。死にたくない、死にたくなかった、唯それだけじゃった。

杖を失った僕は命乞いをしたのじゃ。惨めにみっともなくのう、誰に憚るでもなく、まあ周囲には生きているものは何一つなかったから関係ないんじやが。

地べたに這いつくばり両手を投げ出して必死に懇願したんじや。死にたくない、殺さないでくれ、いのちだけは……とな。

その時僕の中の何かが壊れたような気がしたよ。

友を奪われ、仲間を殺されたにも拘らず、その元凶ともいうべき怨敵に自らの命を助けてほしいと願ったんじやからのう。

僕が命乞いをした幾許かの後じゃった。

それは動作を停止したのじゃ。動くのを辞めた、と言ってもいいかもしれん。

取り敢えずその動きが止まったのじゃ。

後は分かると思うが蠍は球体上の何かになっていた、それで僕は命を救われたのじゃ、今ここにいるのも蠍がああなったからに他ならぬ。

期間を置いて学院長となった僕はその玉を『破壊の玉』として学院の宝物庫に保管したのじゃ、誰の手にも渡ることが無いように……

・・・のじ。」

かくて青年は誇りを捨てた。

オスマンの告解ともいうべき昔語りは沈黙を持って迎えられた。

血を吐くように、絞り出すようにして紡がれた言葉はルイズ達に強い衝撃を与えた。

ここハルケギニアでもその名を知らぬものはいないとまで謳われた
オールド・オスマンにこんな屈辱の過去があつたとは。

ルイズは思い返していた。変貌した『破壊の玉』の姿かたちを。

光沢の有る鈍色の装甲、見るもの全てに恐怖を与える巨大な爪甲、
相手を睨む二対の赤い双眸。

それらの外見的特徴はまさしくオスマンの述べた鋼鉄の蠍そのもの
だった。

メガトロンの配下に加わった蠍はラヴィッジと同様にルイズの使
い魔になつたらしい。

ルイズの説明を聞いたオスマンはやはりといった様に首肯した。オ
スマンが言うにはルイズがその蠍を配下に加えるのは構わないそ
うだ。

ルイズがメガトロンの使い魔として召喚した時から薄々と予感して
いたらしい、ヴァリエールの使い魔と『あれ』は同じものだ。

我々がどうにかできる範疇を超越した何かなのだと。

寧ろルイズに従っているメガトロンに管理してもらえれば幸いであるそうだが、故にそれは了承され、蠍はルイズの使い魔達の一体となった。

『破壊の玉』に関する全てを話し終えたオスマンは深く深く息を吐いた。

小さく肩を屈めるオスマンはいつもよりも二回りほど縮んでしまったようだった。

泰然とした普段の態度からは考えられないような表情にルイズは困惑する。

何を話すべきなのか、何を思うべきなのか、思いがグルグルと脳内を駆け巡る。消沈するオスマンにルイズが話した言葉はこれだった。

「オールド・オスマン。私は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは彼らを立派に従えてみせます。杖に誓つて。」

何の臆面もなく言い切るとそのまま学院長室を後にするルイズ。キルケやタバサも一礼の後に彼女の後を追った。

三人の少女が退出した後にオスマンは誰ともなく呟いた。

「頼んだぞ、若き勇者たちよ。」

吐き出された言葉は静寂を取り戻した室内にしじまを伴ってゆっくりと溶け込んでいった。

第十三話（後書き）

感想やご指摘が頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8581x/>

ゼロと忠実な使い魔達

2012年1月14日14時45分発行